

11	小国413
学图	

教育部
資料室
法財人団
文部省
検定済教科書
日本新教育研究会編修

国

語

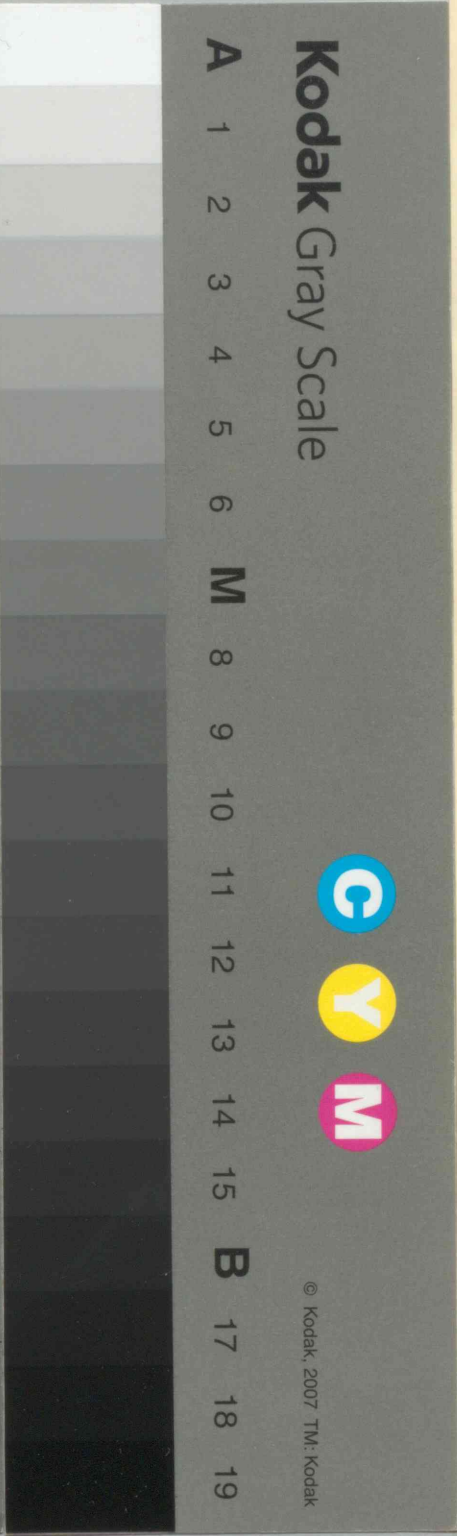
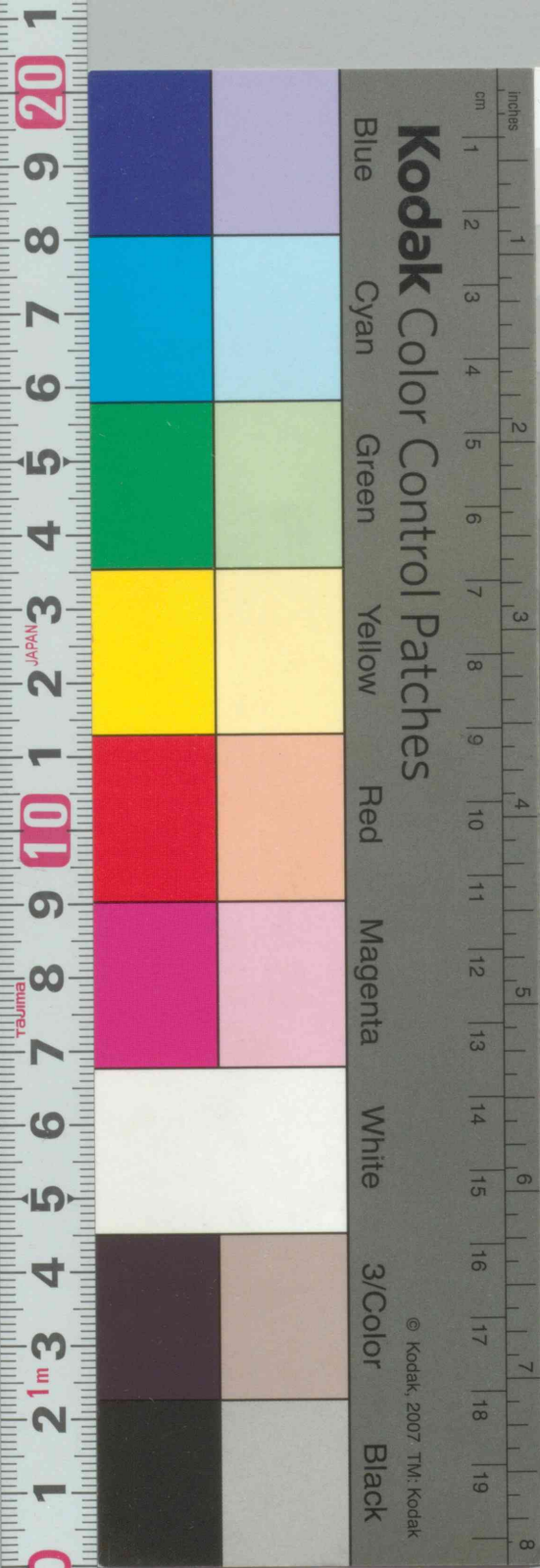
七



KC
G16

学校図書株式会社発行

教
3
01



60375

教科書文庫

8
810
34-1950
01309 49674



寄 贈

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449674

昭和二十五年

月

日 文 部 省 檢 定 濟 小 學 校 國 語 科 用

中央図書館



国 語 七

第 四 学 年 用 上 卷



広島大学図書

0130449674



学 校 図 書 株 式 会 社

廣 島 大 學
教 育 學 部 圖 書

広島大学図書

0130449674





もくろく

一、ぼくは四年生

(一) ぼくは四年生だ

4

(二) 青いはこ

10

(三) 春の朝

17

二、よく聞くよく見る

(一) みそさざい

22

(二) めだか

28

三、まさおの旅

(一) おじさんの家まで

36

(二) 海

41

(三) 燈台に登る

44

(四) しんさくの日記

49

四、ラジオをかこんで

(一) ラジオのこしょう

56

六、わたしたちの放送

——まことの友だち——

——ジョン万じろう——

108

五、海から

(二) メダルのゆくえ

62

(一) ゆうびんの旅

80

(二) 海のとより

92

(三) 漁村の一日

94

(四) 帰る船

99

(五) あらし

102

(六) とびこみ

106

学習のてびき

新しく出たことば (2)

かん字 (1)

136





一、ぼくは四年生

(一) ぼくは四年生だ

「きょうから四年生だ。」と思うと、としおの心はひとりでおどった。そして、顔をあらうと、すぐ外へとび出した。だれかに、

「ぼくは、四年生だ。」

と、よびかけたような気がしてならなかった。しかし、まだ早いのでだれも通らない。としおは、むくむ

くと黒いけむりのあがっている前の工場のえんとつを見上げながら、思いきり息をすって、うちへはいった。

じぶんのつくえの前にすわると、

としおは、進級のお祝いに買ったもらったえのぐばこのふたをあけた。

赤のチューブを取って、左手の親指に少しつけてみた。

「カンナの花の色、チューリップの花の色、早く写生がしたいなあ。」

先生は、きっとぼくたちを写生に



連れて行ってくださるにちがいない。なの花畑には、この黄色がいい。さくらのさいているおかも、かこう。野原には、小川が流れているだろう。ちようちよも飛んでいる。高い空には、ひばりが鳴いているかもしれない。ああ、早くいきたいなあ……」。

としおの空想は、それからそれへと続いた。

「としおさん、ごはんよ。」

と、おかあさんのよぶ声がした。はっと思つて、急いで茶の間へいくと、みんなは、もうちゃぶだいのみわりにならんでいた。

「早くしないとちこくしますよ。」

と、こんどは、ねえさんがいった。としおは、ごはんをたべながらも、だれかに、「きょうから四年生だ。」と、話しかけたいような気が

して、口のところまで出かかっていたが、なぜか口に出なかつた。

そして、だれかが、「としおさん、こんど四年生ね。」と、いつてくれてもよさそうに思いながら、いっしんに、はしを動かしているみんなの顔をながめるのであつた。

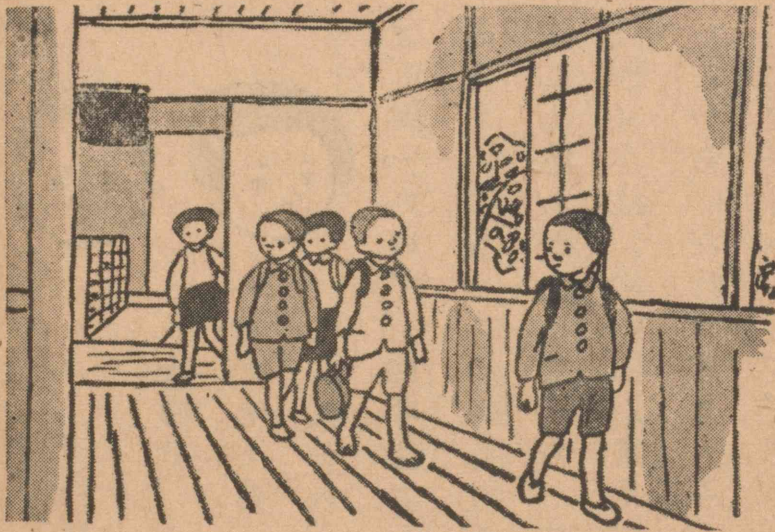
としおが、洋服に着かえて、学校へ出かけようとしていると、となりのおばさんが、さだ子さんを連れてきた。

「としおさん、いっしょにいつてね。おばさん、学校のようなすを知らないから。」

と、いいながら、としおの顔をにこにことながめた。そして、

「としおさんはもう四年生ね。ほんとうに大きくなったこと。」

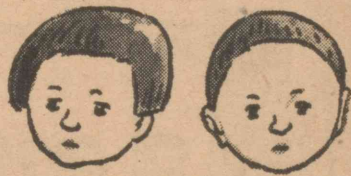
と、いった。としおは、さつきからむねにつかえていたものが、き



かけだしたいような気がした。入口をはいると、どこからかわらい声が聞こえてきた。おばさんたちと別れて、長いろうかを四年の教室の方へ歩いていくと、じぶんの足音がひびいてくるのに思わず「ぎくっ」とした。しかし、別の心が、「おい、としお、何をそわそわしているのだ。しっかりしろ。」としかっているように思えて、また足どり静かに、かいだんを登っていった。

○四年生！　こう思うと、やっぱり心はずんだ。

ゆうにおりたような気がした。すると、おくから、いそいそと出てきたおかあさんが、
「ほんとうに、いつの間にかどんどん大きくなってしまいました。」
と、いつてから、朝のあいさつをした。それから、
「さだ子ちゃんも、きょうから一年生ね。うれしいでしよう。」
と、いった。さだ子さんは、にっこりした。
三人が外へ出ると、としおたちの前にもうしろにも、ふたり連れ、三人連れて、一年生が歩いていく。としおは、一年生がじぶんの方を見ているように思われてならなかった。そして、大またにゆっくりに歩いていった。
学校の門には、大きな旗がひらひらと風に動いていた。としおは



(二) 青いはこ

土曜日。きょうは、四年生になってはじめての自治会をした。いちばんはじめに山田くんが、

「これから、四年生らしくしよう。」

と、いったので、四年生らしくって、どうすればいいだろうという話しあいになった。みんながつぎつぎに意見をいったので、教室がすこしさわがしくなった。すると先生がにこにこしながら、

「きょうは、ずいぶん意見が出るね。こんどは、はじめての自治会だから、だれの意見もみんな聞いてみたいが、時間がかかってなかなかたいへんだ。どうしたらいいだろう。」

と、おっしゃった。

そのことから、めいめいの意見やきぼうを紙に書いて、はこに入れようということにきまった。そうして、ぼくと川村くんが、月曜日までにそのはこを用意することになった。

月曜日。学校の門が見えはじめると、ぼくと川村くんはだんだん早く歩きたした。

「だれもまだ来ていないといいな。」

「だいじょうぶだよ。」

校門をはいると、ふたりともどうとうかけだしてしまった。しんばいしながら教室の戸をあけると、やっぱりだれも来ていなかった。「はこを、どこへおこうか。」

川村くんは、ふるしき包みからだいじそうにボールばこを出した。きのうの日曜日、ふたりでいっしょうけんめい考えて作った青いはこ。さくらのもようがとてもきれいだ。

川村くんは、はこを教室のくぎにかけてから、まがっているのをちよつとなおして、

「みんな早く来るといいな」。

と、いった。まどからいっばい日がさしこんで、花びんの花が、いきかえったように明かるい。門の方でだれかの声が出た。

水曜日。きょう「青いはこ」をひらいた。林くんと小山さんがせりりするかかりだ。

「では、ふたりでかわりばんこに読んでください」。

みんなは、「わあっ」といって、手をたたいた。

林くんが先に読みはじめた。

ぼくのうちにうさぎの子が生まれたから、

ニひき持ってきました。かわいがってください、

みんなが、わらいながらまた手をたたいた。

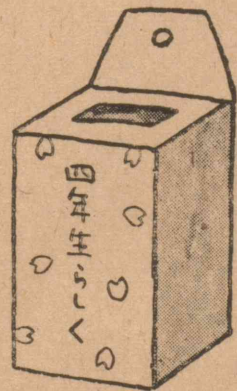
ぼくは、きつと山下くんが書いたのだと思った。

こんどは小山さんが読んだ。

みんなでおこづかいをためて、学級文庫をもっとりっぱにした
いと思います。

その時、先生が何かおっしゃりたそうなようすをなさった。

こんどから、大山くんも、野球のなかまに入れてあげたらいい





と思います。

ぼくもそうですが、じぶんのいいたいことはいいっても、ほかの人のいうことをよく聞かないから、これからみんなで気をつけようよ。もう四年生だから。

先生、いつかとなりの学校へ連れて行ってください。川西小学校の四年生と話したり遊んだりしたいんです。みなさんどうですか。これは、ぼくがほんとうにそう思っているのだ。

先生、ぼくたちにどうしゃばんを使わせてください。先生のおてつだいもしたいんです。

このごろは、ドツジ・ボールの時、みんながしんぱんのいうことをよくきくから、気持がいいです。本田く

んはとても公平です。

男の子は、元気よく運動するのはいいですが、女の子のじゃまにならないように気をつけてください。

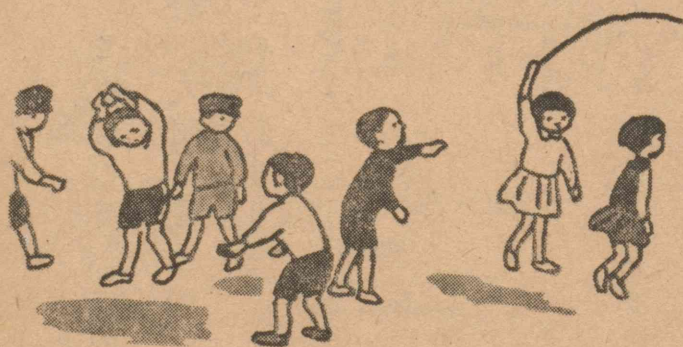
すると、土田くんが、「女の方だって」と、いったのです。こしさがしくなりました。先生が、

「話しあい、あとでゆっくりしよう。」

と、おっしゃったので、また読みはじめた。

春子さんは、よくうちのてつだいをします。みなさん、知っていますか。

へんなことばや、みんなにわからないよ
うなことばを、わざとつかわないでください。

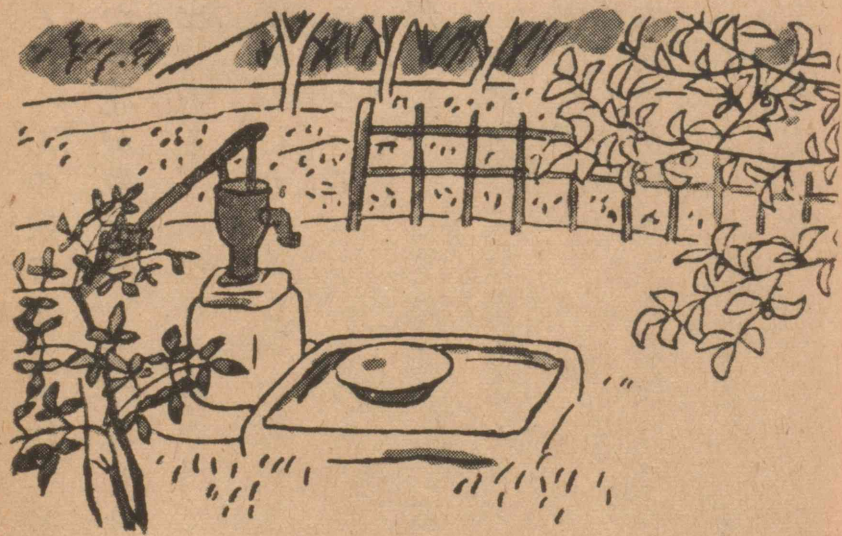


ぼくは、だいきらいです。みんなさんせいしてください。——
それから、まだ、学校をきれいにすることや、「こどもの日」にや
りたいことなどいろいろあった。すっかり読み終った時、先生が、
「さあ、これからみんなて話しあってみたいのだが、あまりたくさ
んあるから、これをいくつかにまとめてみたらどうだろう。そう
すると、話しあうのにきつとつごうがいいね。——いくつにまと
められるかしら。みんなて考えてやってみよう。」
と、おっしゃった。

みんなは、たいへんだなというような顔をして、しばらくだまっ
ていた。ぼくは、じぶんの書いたのがどんななかまにはいるかなと
思って、早くやってみたいような気がした。

(三) 春の朝

○ あたたかい朝だ。きのうの雨は、
夜のうちにやんだらしい。いどばた
のなんてんの葉は、まだぐっしより
ぬれている。前の畑からは、うすい
ゆげがもやもやと立ち上る。土は水
をふくんで、ふくらんでいる。
はをみがきながら、ふと見たら、葉
と同じように、青いうめの実がたく
さんなっていた。

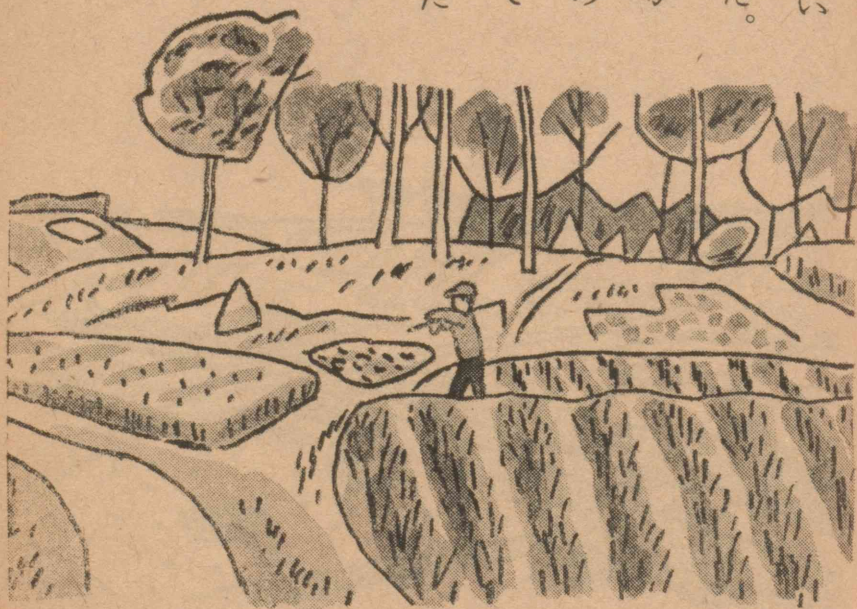




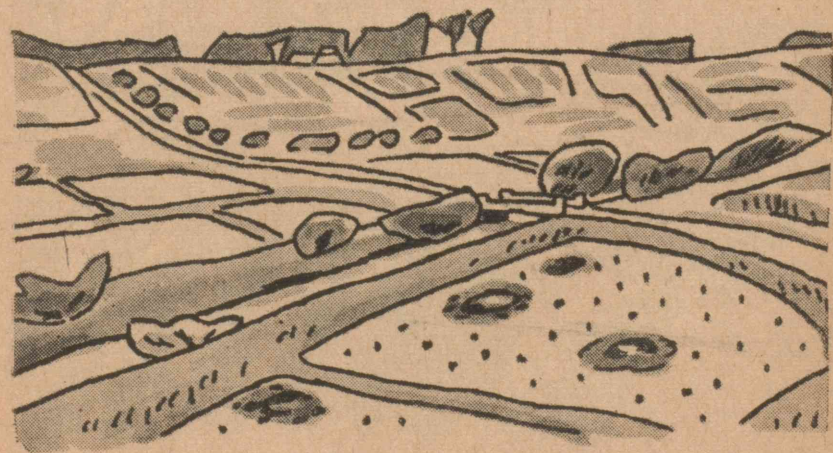
○ じろくくんの家のさくらは、もうすっかり花が散って、うすみどりの葉が出ている。朝の日があたって、やわらかいかげが、向かいの家のしようにうつつている。このあいだ、学校の帰りに、ここを通ったら、花びらが、首のところに落ちこんだのを思い出した。

木は大きいが、さくらんぼは小さくてたべられない。どうしたら、店で売っているようなのがなるのかな。

○ 空のどこかでひばりが鳴いている。麦は、三〇センチぐらいにのびた。向こうの林のこずえは、なんだかけむったような色をしている。林のそばから、くわをかついだ人が出て来た。あ、ひばりの声がやんだぞ。どこへいったのかしら。



○ 田の土は黒くてもみずみずしい。
 西風のふくころは、白っぽい氷が
 とけもしないで、一日中きらきらし
 ていたが、今はかげも形も見えない。
 ところどころ土がもり上がっている。
 どじょうをほったあとだ。あちらこ
 ちらにすき起こした田がある。もう
 間もなく、なわしろを作るんだな。
 かえるが出てきて鳴くのも、もうす
 ぐだろう。



○ たんぼの向こうには、遠い山々
 が見える。そのいただきには、まだ、
 雪が白く残っている。
 ここでは、なにかも春だとい
 うのに。
 でも、このあたたかい風は、だん
 だんあの雪をとかすだろう。雪どけ
 の水は谷川をとんで下るだろう。そ
 うしたら、山の小鳥たちは、谷川の
 ほとりて、春の歌をうたうだろう。

二、よく聞くよく見る

(一) みそさざい

きょうは、おじさんとハイキングにいった。
小鳥ずきのおじさんは、とちゅうで小鳥の
話を、いろいろしてくださった。

だんだん山の方へは行っていくと、とつ
ぜん、大きな声でふしの長い鳥の声が聞こ
えてきた。

「おじさん、あの声は」

「みそさざいだよ。かわいい声だろう」

「どこで鳴いているの」

「ほら、あそこだよ」

見ると、木のえだのかぶさった岩の上で、おをびくつびくつとあ
げながら鳴いている。ちよつと見ると、すずめの半分ぐらいの鳥だ。

「おじさん、あんなに小さい鳥が、よくあんな大きい声で鳴くね」

「それに長く鳴くだろう。——春男くん、あの鳴き声、どんなふう
聞こえる。よく聞いて、手ちように書いてごらん。ちよつとむず

かしいかもしれないが」

ぼくは手ちようを出して、じつと聞いていたが、
こみいつているので、なかなかわからない。

「おじさん、とても書けそうもないよ」



「なるほど、こみいつているし、長く鳴くからね。」

みそさざいはしきりに鳴いている。

聞いているうちに、ぼくは、なんだか書けそうな気がしてきたので、思いきって書きはじめた。

チリチリチリチリチリ、カラカラカラカラカラ、

チリチリチリチリ、カラララララ、チーリヤ

チーリヤチーリヤチーリヤチーリヤ、カラカラ

カラカラチリリリ。

よく聞いていると、チリチリチリチリと高く、つぎのカラカラカラカラは低く、そのつぎの、チリチリチリチリは、また高

い。つぎのカラララララは低く、チーリヤチーリヤチーリヤチーリヤチーリヤは高く、つぎのカラカラカラカラは低く、終りのチリリリは、高くつり上げるように鳴く。

でも、このチリチリもカラカラも、けっしてチリチリでもカラカラでもなく、ただ、そうらしく聞こえるのを、ぼくが書いてみただけだ。

おじさんはぼくの書いたのを見ながら、

「うん、なかなかよく書けたね。でも、鳴き声は、聞く人によっていろいろに聞こえるものだよ。——そうそう、ある地方ではね、この鳥の鳴き声を、

一ピイニイトク三ピイ四インナ五チーチブン。プクチクリンチャン。

と、いつているところもあるよ。
と、おっじゃった。

「ずいぶんかわっているね。——ほんとに、そんなふう聞こえるかしら——」。

ぼくはまたじつと聞いてみた。そのつもりで聞いていると、なんだか、そんなふう聞こえてくるのでおもしろくなった。

「さあ、もつとほかの鳥もしらべてごらん」。

それから、ぼくはおじさんと歩きながら、鳥の声ばかり気をつけた。

少しいくと、こんどは、すきとおってすずしいような声が聞こえてきた。なんだかあせをぬぐってくれるような声だ。

「おじさん、あれは」。

おじさんは道ばたの石にこしかけて、あせをふきながら、

「ひがらだよ。きれいな声だね」。

と、おっじゃった。

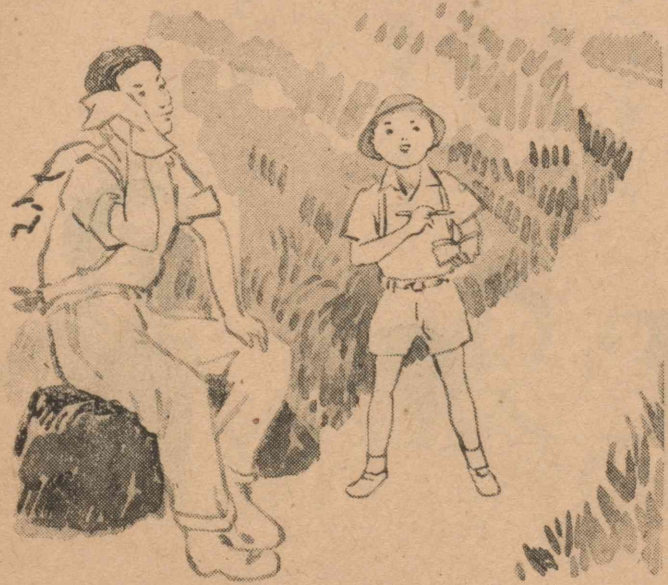
ぼくは、立ち止まってじつと聞いた。

チチピン、チチピン、チチピン。

こんどは、すぐ書けた。

それからぼくはおもしろくなつて

おじさんの先にたつて歩きだした。



(二) めだか

五月二十日

ぼくは、一ろうくんやとしおくと、めだかの観察をはじめた。

一ろうくんのおとうさんは、魚の研究家だから、きょうは、めだかについて話をしていた。

「めだかは、ほんとに研究するのにつごうのいい魚だよ。だいいちどこにでもいるし、日本中どこでもたまごを産む。それだから小さいから、えさもたくさんたべない。そのうえ、そだち方が早く



て、とてもじょうぶだ。

たまごからかえっためだかが、一月か一月半ぐらいたつと、もう親になって、たまごを産むようになるんだからね。だから、子どもから親になるまでのようすもよくわかって、研究するのにも、ほんとにつごうがいい。きみたちも、りっぱな研究をやってみるんだね。」

おじさんは、いかにも楽しそうにお話してくださった。

ぼくたちは、ガラスびんを二つあらって、それに取ってきためだかを分けて入れた。めだかは、元気よく泳いでいた。

五月二十一日



ぼうふらを取ってきてやった。よくたべるのにはおどろいた。見ているうちにどんどんたべてしまった。

五月二十七日

めだかは元気よく泳いでいるが、少しもたまごを産まない。

きょうは、みじんこをえさにやった。みじんこを見つけるのはたいへんだった。方々さがして、やっと学校のうらのどぶで取った。

みじんこをやると、とびつくようにしてぱくぱくたべてしまうので、こう早くたべられてはたまらないと

思って、こんどはみんなでいとみみずを取りにいった。

五月二十八日

いとみみずをやるようになってから、前よりも元気になったようだ。でも、まだたまごを産まない。

五月三十日

一つのびんのめだかが、たまごを産んだ。でも、もう一方のは産まない。どうしてだろう。さっそく一ろくんのおとうさんに聞いてみたら、それはおすばかり入れたからだそうだ。それでは産まないのがあたりまえだ。

それで、ぼくたちはめだかを入れかえて、どのびんにもおすとめすが、いっしょにはいつているようにした。そうして、びんの中へ細い木のえだを入れておいた。

六月一日

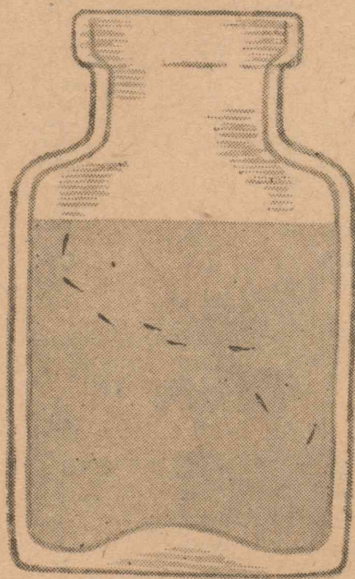
きょうは両方とも産んでいた。入れておいた木のえだに、たまごがついていた。ぼくたちは、その木のえだをそっとまた別のガラスびんに入れた。それから水を八分目ぐらい入れて、日のよくあたるあたたかい所へ出しておいた。こうすれば、早くたまごがかえると
いうことだ。

六月十二日

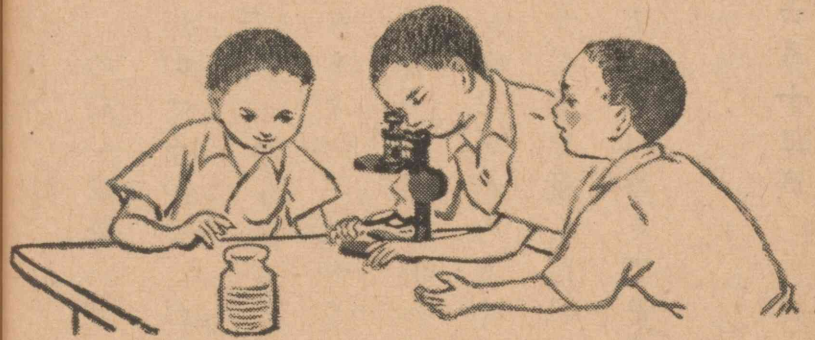
めだかは続いてたまごを産んでいる。そのたまごがじゅんじゅんにかえるので、ガラスびんの中は、めだかの子ども運動会のよう
だ。

かえったばかりのめだかの子どもは、あまり小さいので、みじん
こをそのままたべることができない。

ところがみじんこがいつの間にか
子どもを産んだので、めだかの子ども
もたちは喜んでそれをたべ始めた。



六月十三日



よい天気だ。

めだかたちは、にぎやかで元気がいい。みじんこを入れてやった。

きょうはたいへんおもしろいことがあった。としおくんが、おじさんからいただいたのだといって、けんびきょうを持って来たことだ。

みんな大喜びで、かわりばんこにつかった。としおくんは、

「あまりいいけんびきょうじゃないよ。」

と、いったが、なかなかよく見えた。

たまごに、もう目ができているのもあった。血

がぐんぐんからだの中をかよっているのが、はっきりわかるのもあった。一ろうくんはずいぶん長くのぞいていた。

「よく見えるなあ。あ、よく見ると、たまごにもいろいろちがったのがあるよ。」

と、いったので、ぼくととしおくんは、

「早く見せて。」

と、いって、代わってもらった。

一ろうくんのおとうさんが、

「見たら、すぐ書き写しておくといいね。」

と、おっしゃったので、そうすることにした。



たまご

めだか



おす



めす

三 まさおの旅

(一) おじさんの家まで

まさおの村からおじさんの町まで、
汽車で一時間ほどかかります。その町
から十キロメートルほどいくと、燈台
があります。

まさおはふつか続きの休みに、どう
しても、燈台までいってみたいと思っ

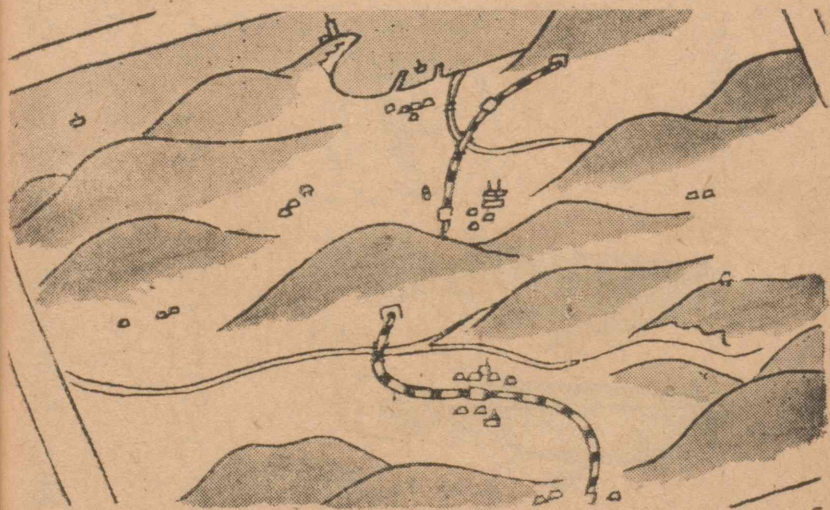
ました。その話をおとうさんにすると、

「まさおは四年生になったんだから、
おじさんのところまではひとりで行
けるだろう。こんどはひとりで行っ
てみてはどうだね。」

と、いわれました。ちよつとしんぱい
になりましたが、まさおはひとりで行
くことにきめました。

☆

何度かいったことのある所なのだが、
やっぱりしんぱいでした。汽車を待っ



ていながら、

「もしも、汽車がこんでいて、乗れなかったら。」

「もしも、はんたいの方に乗ってしまったら。」

「もしも、乗りすごしてしまったら。」

と、そんなしんばいばかりしていました。きつぷをにぎっている手の中がいつの間にか、すっかりあせばんでいるほどでした。

だが、まさおがしんばいするほどのこともなく、おじさんの家に、ぶじに着くことができました。おじさんも、おばさんもたいへん喜んでくれました。

☆

夜は、おじさんから、海の話をとくさんしていただきました。

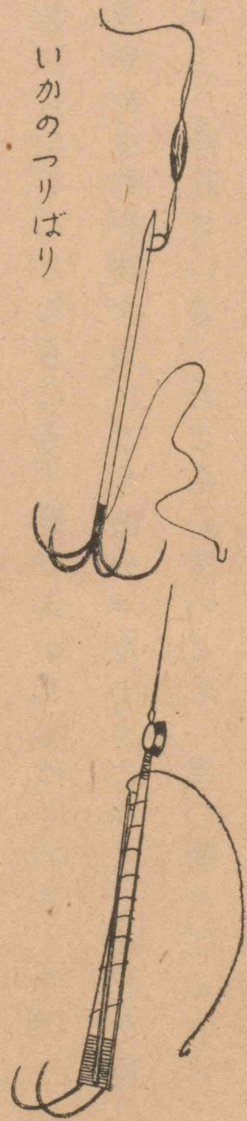
「いかつりにいちど連れていってやりたいな。そうだ、陸から、六キロメートルぐらいおきに出る。もつともつと出る時もあるが、いい所でほをおろし、つりの用意をするのだ。用意ができると、ばんのごはんをたべる。そして、いかの来るまでねているというわけだ。」

あちらにも、こちらにも、船の火が見えはじめ。きゆうに、にぎやかな町が波の上にできあがったようになる。それが波にうつって、ゆれている。ねころんでいると、星の数もどんどんふえていくのがよくわかる。そのころから、燈台の光がぴかりぴかりと、はつきり見えはじめ。

ちよつとねむったと思うころ、

『いかが来たぞ。』

という声で、目がさめる。にわかにいそがしくなる。こんなかっ
ここのつりばりだが。



いかのつりばり

いかはつりばりに、長い足をひっかけたまま、どんどんつりあ
げられる。ところが、あまり強くすいついていて、はなすのには
ねをおることがある。むりにはなそうとすると、じぶんの手がす
っかりすいつかれてしまうのだよ。

こんなにして、うまくいくときには、三十分ぐらいの間に、三
百も四百も取れることがある。夜明けまで、つり続けて、朝日の
上るころ帰って来るのだ。

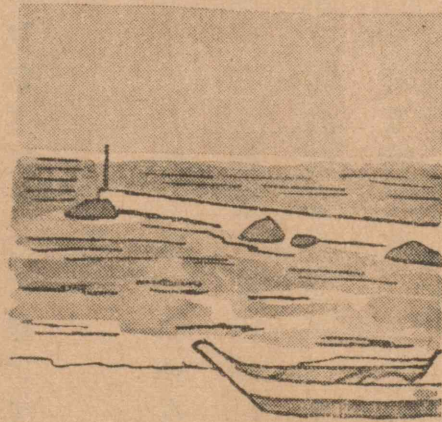
でも、そんなにいいことばかりではない。風がふいたり、うね
りが大きくなったり、あれはじめると、たまらない。いかつりど
ころか、命からがらひきあげて来なければならぬ。なにしろ、
三・四人乗りの小さな船だから。そんな時には、ことに燈台がこ
ころ強く思われるよ。

(二) 海

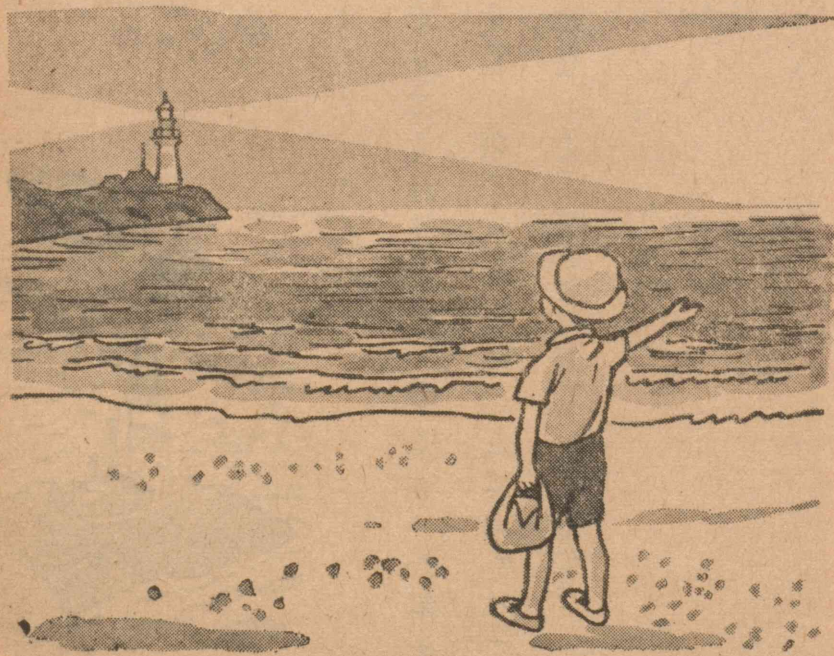
港の朝です。空には、まだ星が残っています。

まさおは海岸線にそって、どんどん歩いていきました。ずうっと遠くの方に燈台の光がきれいに見えます。三年生の時に、学校でお友だちと燈台のことを調べてから、ぜひいつてみたいと思っっていました。その燈台がもうすぐそこに見えています。すなはまを歩きながら、この朝のけしきをどう表わしたらよいかと考えてみました。

波のくずれる音が聞こえる。
ボ、ボと汽船のきてきになる。
星はだんだん消えていく。
もう、夜明けだ。



波が、
空が、
太陽の上るのを待っている。
朝の光は、
波にのって、
海岸線におしよせて来る。
朝の光は、
空に流れて、
空気にとけて、
どこまでも、どこまでも、
ひろがっていく。



(三) 燈台に登る

燈台の人たちは、

「よくまあ、こんな朝早く来られたものだね。」

と、いいながら、こころよくむかえてくれました。中でも、六年生になるしんさくくんは大喜びでした。朝ごはんをいっしょにたべてから、大きな岩の上で、ふたりはなかよく話しあっていました。

「船がずいぶん出ているね。」

「あのまっ白な船は外国のだよ。」

「乗ってみたいな。」

「『あんな船に乗って、アメリカやヨーロッパにいつてみたいなあ』と、ときどき思うよ。」

「しんさくさんは大きくなったら、何になるの。」

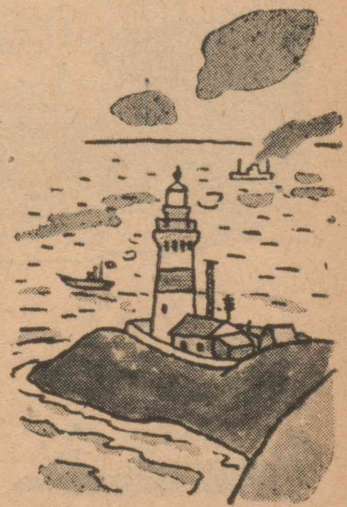
「そうだなあ、ぼくはやっぱり海のしごとがいいな。船に乗るとか、燈台をまもるとか。」

「ぼくも、大きな船に乗って世界中をまわってみたいな。」

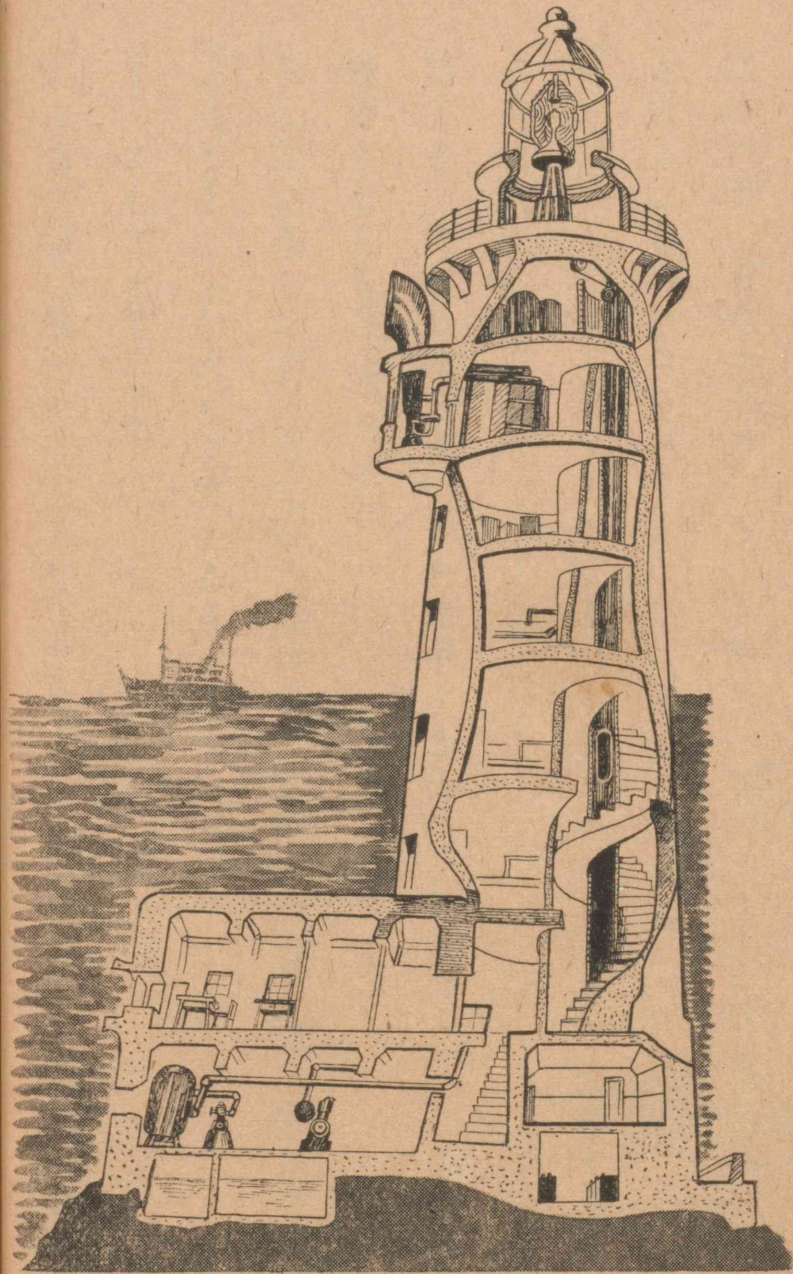
「たんけんたいもいいな。」

「ロビンソン・クルーソーのように、だれもない島で生活するのもおもしろいだろうね。」

「だめだよ、さびしくて。こんな所だって、とてもさびしいんだもの。」



ふたりは燈台の中にはいってみました。



「ここはかいだんばかりだね。」

「ぐるっと回って二階へいってみよう。」

「ここはどんなしごとをするところ。」

「夜になると、だれかここにどまっていて、かわったことでもあると、すぐこのボタンをおす。それがぼくたちの家にすぐひびいてくるようになっていいるのだよ。」

「ここはきかいばかりだね。」

「へんなにおいだろう。油のおいだよ。いよいよいちばん上に来たよ。」

「これが、レンズだね。」

「ガラスがたくさん組み合わさって、できているんだ。」

「まるで、すいしよのへやのようだね。」

「ちよつと海の方を見てごらん。」

「こわいね。どのくらいの高さだろう。」

「およそ、五十メートルはある。こんなに高いのに、山のような波がやってくる時には、すっかりさらわれていってしまうのではないかとしんばいになるよ。」

「このへやは、夏などは暑いだろうね。」

「とてもいられないよ。今だって、こんなに暑いんだから。」

「この燈台の光は何しよつこうなの。」

「五十六万しよつこうだよ。」

「そ、ういわれてもちよつとわからないね。」

「なんでも、四キロメートルもはなれた所でも、新聞が読めるほどだそうだよ。」

「おどろいたな。」

「さあ、おりようか。」

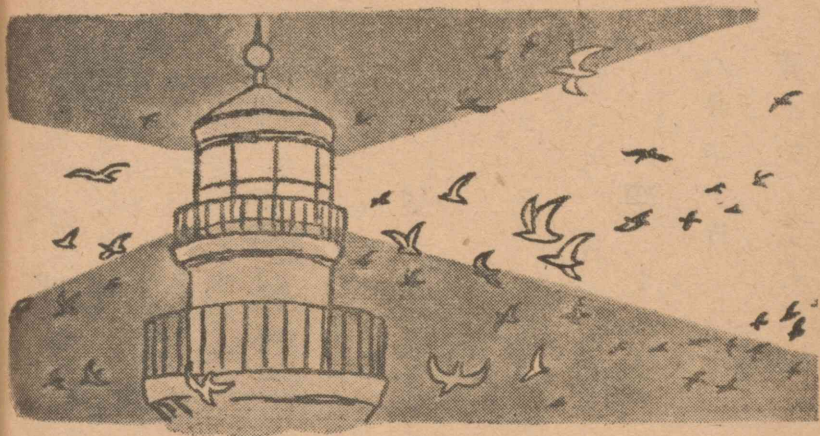
「もつと、いろんなことを話してもらいたいなあ。」

「じゃ、ぼくの日記を見ながら、話そうよ。」

(四) しんさくの日記

八月二十日

ぼくが、ふるにはいつていた時のことです。パツ、パツとへんな



音がするので、あわててとびだしてみたら、わたり鳥が燈台につきあたって落ちているのです。光にまどわされて、その中にとびこんでしまうのです。どうしても止めようがありません。みているよりしかたがないのがざんねんです。とてもかわいそうでした。まりません。

その夜は、わたり鳥のことが気がかりで、すぐにはねつかれませんでした。

八月二十一日

ゆうべ落ちたわたり鳥を数えてみたら、五十二羽もあった。父は、いろいろと話してくれました。

「燈台は海で働く人にとっては、命のつなだが、わたり鳥にとっては、とてもおそろしいものなのだ。月の明かるくないとき、燈台のとうにつきあたって死ぬこともある。また、強い光に目がくらんで、その中にとびこみ、そしてつきあたってしまうこともあるのだ。ヨーロッパのある燈台では、ひとばんのうちに、ひばりが一万五千羽も死んだことがある。なんとかして、すくうことはできないものかと考えて、いろんなことをくふうした。しんさくだったら、どうする。なぜつきあたるかということを考えたら、ふせぎようもあるわけだ。」

一つは、燈台のレンズのところへとまり木をたくさんつけること、もう一つは燈台の所へ小さな電燈をたくさんつけてやることだね。そんなかんたんなことがなぜできないのでしょうか。

九月十日

すごいあらしでした。

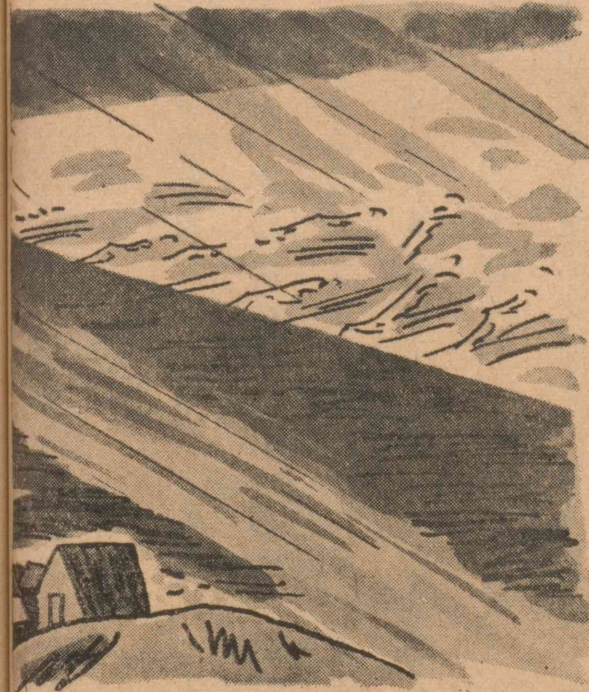
かわらが飛ぶほどでした。

海がもうじゆうのように

ほえたてました。

燈台の光が いなずまの

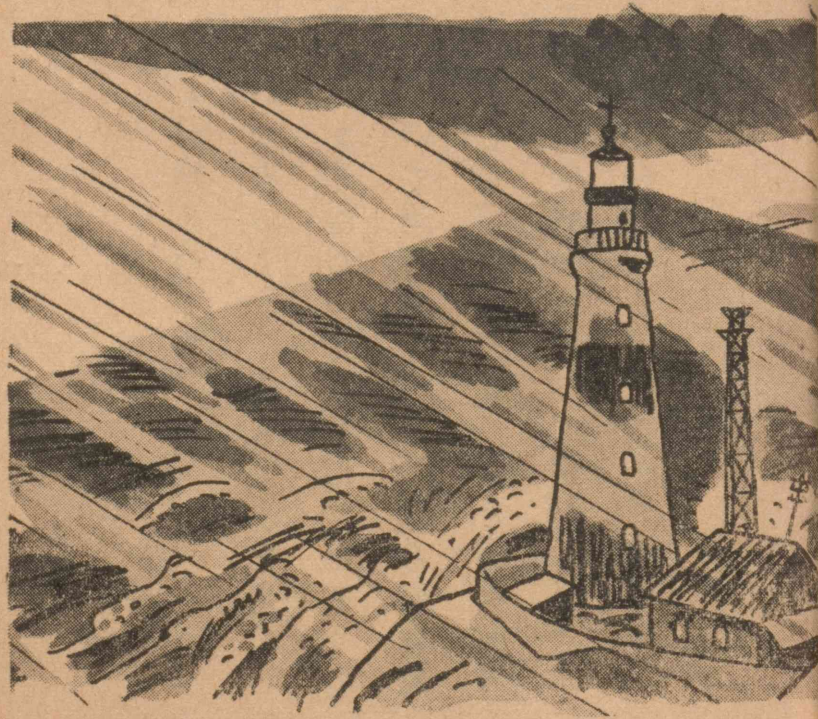
ように海をてらします。



SOS
SOS

たすけてくれという無電
がはいっていると、父がい
っていました。

SOS のしらせをきく
ときほど、「どきっ」とする
ことはありません。



十月二十日

秋ばれのよい日が続きます。海もおだやかです。

父は燈台の入口の所に立って、いつものように空もようを見ていました。ひやっとするので、足の指を見たら、まむしだったそうです。親指をかまれていました。いそいで消毒して、おじさんの自転車に乗せてもらって、病院にいきました。わたしも、あとからかけていってみました。でも毒のまわりが早かったものですから、どうしても、四・五日は入院しなければならぬということでした。

十二月二日

朝からつめたい雨がふっていました。空も海もどす黒い色です。

このような日には学校に行くのがほんとうにつらい。自転車もつかえないし、十キロメートルもぬれて歩かなければならない。何度もとちゅうからもどろうと思いましたが。でも、もっどひどいところを船に乗ったり、そりに乗ったりして通っている人のことを思っ学校までいきました。

「よく来たね。」

と、いう先生のことばを聞いて、やっぱり来てよかったと思いました。

四、ラジオをかこんで

(一) ラジオのこしょう

あきらくんの家のラジオが、こしょうしてしまいました。おとうさんが、

「あまりいじらないうちに、ラジオ屋さんにたのもう。」

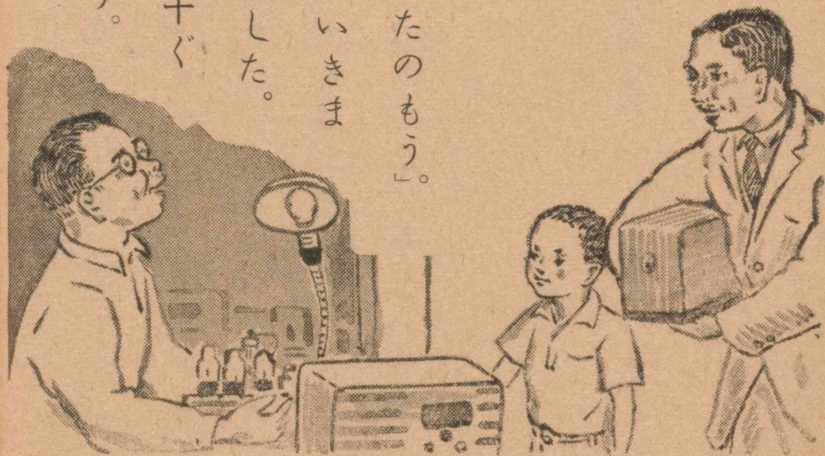
と、おっしゃって、近所のラジオ屋に持っていきま

した。あきらくんもいっしょについていきました。

ラジオ屋のおじさんは、めがねをかけた四十ぐ

らいの人で、とてもおもしろいおじさんです。

にこにこしながら、



「どんなぐあいですか。」

と、いってめがねをかけなおしました。おとうさんが、

「しんくうかんはだいじょうぶのようですが、少しも聞こえないんですよ。よく見てください。」

と、いったら、おじさんは、ラジオにさわりながら、

「それじゃあ、きつとおなかが悪いんだ。どれどれ。」

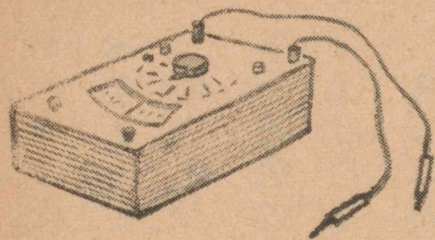
と、いって、すぐテスターで調べはじめました。

テスターはこしょうを調べたりする機械で、ちよう

どメーターのようなものに長い線が二本ついています。

「ははあ、やっぱりおなかをこわしているな。」

おじさんはねじまわしを持って、どんどんしごとに



かかりました。見ているうちに、はこの中の機械をじょうずに取り出しました。

おじさんはテストの線の先で、ラジオの線のつけねにさわったり、茶色のがたいものをつついたりしました。

「うん、ここだ。ほら、見てごらん。ここがはなれているだろう。」

「あ、ほんとだ。でも、おじさんは見つけるの早いね。」

「はっはっは。ラジオのお医者さんだもの。」

おじさんは、はんだごてで、はなれているところをつけてしまうと、スイッチを入れて、静かにダイヤルを回しました。すると、かわいい歌が聞こえはじめました。

おがわのみずはさらさらど、

やさしいおどをたてている。

おもしろそうにこやぎまで、

わたしのうたをきいている。

でも、それはとても小さい声で、それになんとか少しかすれたような音でした。

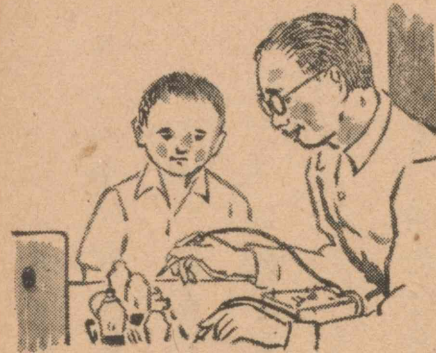
「よしよし、もつとよく見てあげますよ。」

おじさんはそういって、テストの二本の線の先を、何本もあるラジオの線に別々にあててみました。ちょうど、お医者さんがちょうしんきをあてているみたいです。

おじさんは、同じようなことを何度も何度もくりかえしました。よく見ると、そのたびにテストアのはりが動いたり、動かなかったりします。

おじさんは、さっきからちっとも話をしたりわらったりしなくなりました。口をちよつとまげて、どンドン仕事を続けています。

あきらくんは、なんだかラジオが病人のような気がして、病気があまりひどくなければいいなあと思いました。



「これがいけない。」
おじさんは小さい声でそういって、三センチぐらいの細長いものを一つとりかえました。

「もう、これでだいじょうぶ。」

と、やつとにこにこしました。おじさんがスイッチを入れたら、ラジオが大きなはっきりした声で、

「これで、みなさんの時間は終わりました。NHK」といいました。するとおじさんが、

「これで、ラジオのしゅうぜんも終わりました。NHK」

といったので、おとうさんもあきらくんも、どうとうふきだしてしまいました。おくの方で、ラジオ屋のおばさんもわらっていました。

帰る時、おじさんがめがねをはずしながら、「ではおだいじに。むりをしないでください。」

と、いいました。

(二) メダルのゆくえ

— かわいい音楽 —



○アナウンサー

「みなさんお元気ですか。きょうは、これから田村先生が『メダルのゆくえ』というお話をしてくださいます。よくお聞きしましょうね。」

○田村先生のお話

じろうくとたけしくんは、たいへんなかのいい友だちでした。ある日のこと、学校の帰り道でメダルを拾いました。さあ、どんなメダルだったでしょう。

それは長四角のメダルで、表には、かけっこの選手がスタートし

ているすがたがあつて、うらには、年号がしるしてありました。

ふたりはすぐ交番へとどけましたが、それっきりメダルのことはわすれていました。ところが、それから一年あまりたったころでした。メダルの落とし主がまだわかりませんでしたので、ある日、メダルはまたふたりの手にもどってきたのです。

「じろうくん、これを落とした人、どんな人だろう。」

「きつと、からだの大きいりっぱな選手だね。」

「いくつぐらいの人かしら。」

「ほら、このうらに一九三〇とかいてあるだろう。」

そうすると、——もう四十過ぎているね。」



「じゃ、ぼくのおとうさんとおなじくらいだな。よく見ると、メダルはもうかどがまるくなって、なでるとつるしています。」

「きつと、いつもだいに持っていたんだね。」

「たけしくん、このメダル、これからどうしよう。」

「ふたりのものだから、ふたりで毎日こうたいに持ったら。」

「ああ、それがいいね。じゃ、きょうはたけしくんきみ持ってよ。」

「そう、なんだか、きゆうにたから物を持ったような気がするな。」

「メダルのおじさんが、どこかで見ているかもしれないね。」

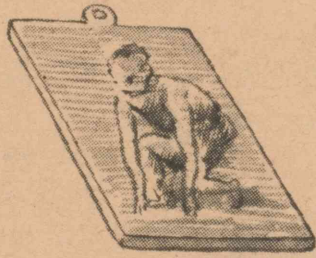
「うん、『そのメダル、だいにしておくれよ。』といっているような気もするよ。」

「ね、たけしくん。ぼくこれから、メダルのおじさんのようにもっと運動するよ。」

「ぼくだって、もっと本気で勉強するよ。」

ふたりはこのメダルに名をつけました。なんという名でしよう。「きぼうのメダル」です。こうして、その日からこうたいに持つことにしました。さあ、これから、このメダルはどうなるでしょう。

そのあくる日、たけしくんたちは学校で野球の試合をしました。ひとりたりないので、あまりうまくないじろうくんも入れました。でも、じろうくんはきつとうれしかったでしょうね。じろうくんは、はじめ三しんしました。



二度目のバッターじゅんになった時でした。たけしくんがとんで来て、

「おい、『きぼうのメダル』のことわすれちゃだめだよ。きょうはきみが持っているんだから、いいかい、しっかり」。

と、いって、じろうくんのかたをたたきました。

「うん」。

じろうくんは、バットを二・三度強くふって、バッターボックスに立ちました。みなさんじろうくんはみごとにうつでしようか。

だいい球はストライク。からぶりです。じろうくんは力いっぱいふったので、しりもちをつきそうになりました。みんなは、そのいきおいにびっくりしました。キャッチャーのしげるくんが立ち上が

って、

「おうい、みんなゆだんするな」。

と、大きな声でどなりました。

ピッチャーが力いっぱい投げました。

「カーン」。

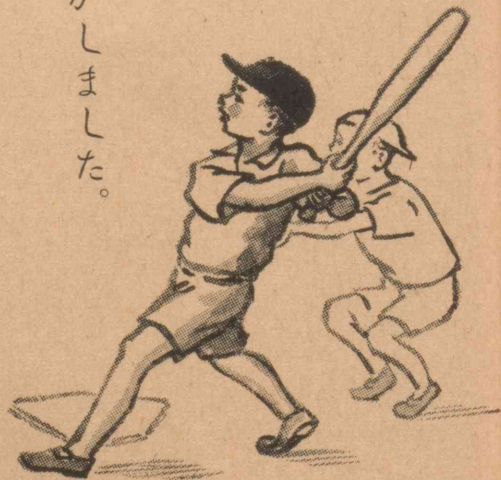
じろうくんは、手がしびれるような気がしました。

「ヒット、ヒット」。

「わあっ、わあっ」。

じろうくんは、むちゅうで一いへ走りこみました。見ると、外野のひろしくんがまだボールを追いかけています。

「よし」。



じろうくんは、またものすごいいきおいで二るいへ走りました。

「セーフ」。

「わあっ」と、いう声と、手をたたき音が届きました。じろうくんは、どんなにうれしかったでしょう。二るいからたけしくんの方を見るとたけしくんは、まだぼうしをふっているのです。じろうくんは、ひよっと「きぼうのメダル」が目にかびました。きっと、メダルのおじさんも、どこかで手をふっているような気もしたでしょうね。

こうして、「きぼうのメダル」は、毎日ふたりを元気づけてくれました。ふたりはメダルのことを考えると、いつも心がひきしまってくるのでした。もう、メダルを持っている日でも持っていない日でも、気持は同じでした。

メダルは、きっとふたりのこころの中にはいりこんでしまったのでしょう。

また、ある日のことでした。

おべんとうがすんだあとで、くにおくんが話をする番になりました。くにおくんは、四年生になってからはいつて来た新しい友だちで、ふだんでも少しもるのですが、みんなの前で話す時になると、なかなか話せなくなるのです。先生が

「では、きょうはくにおくんに話してもらいますよ。くにおくんはね。きのう先生だけに話した時は、たいへんよく話せたのですよ。

だから、きょうもきつとよく話せますね。くにおくん、きのうの
ようにね。それから、みなさんも、くにおくんががんばって
少しでも話せるように、きょうはどくべつおうえんしてください
ね。

と、おっしゃいました。

たけしくんは、ほんとにくにおくんがちよつとでも話してくれ
ばいいなと思って、くにおくんが前に出た時むねがどきどきしまし
た。ほんとにちよつとでも話せたらいいですね。

「さあ、くにおくん、しんばいしないでね。」

教室がしいんと静かになりました。くにおくんは、くちびるをち
よつとふるわせて話そうとしました。

「だいじょうぶですよ。さあ、話しましょう。」

先生の声がやさしく聞こえました。と、その
時でした。

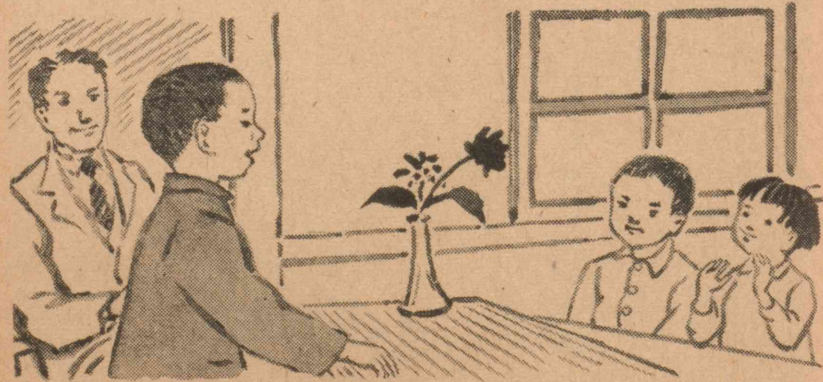
「ぼくは、うちのひよこの話をします。」

くにおくんの声が教室にひびきました。少し
ふるえたような声です。たけしくんは、なみだ
が出そうな気がしました。

話は短い話でした。

みんなはうんと手をたたきました。

先生は、やさしい目でじつとくにおくんを
見ながら、



「よく話せましたね。りっぱに話せましたよ。もうだいじょうぶ。くにおくん、おめでどう。——それから、みなさんありがとう。これから、きょうのようにおうえんしてあげてくださいね。」
と、おっしゃいました。——みなさん、くにおくんのうれしそうな顔がわかりますか。たけしくんは、ほんとに、くにおくんが話せてよかった、よくがんばったなあと思いました。

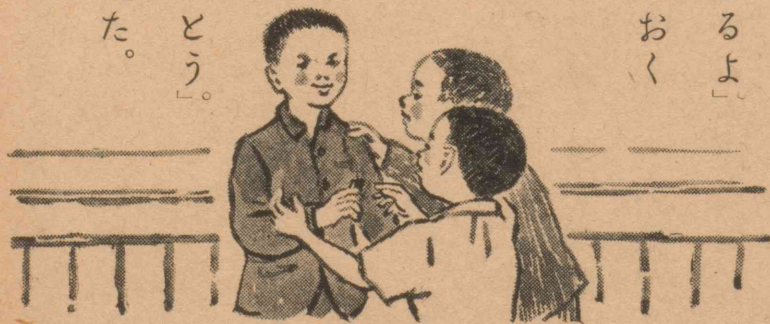
その日の帰り道、たけしくんはじろうくんにそうだんしました。「じろうくん、ぼくたちのメダル、もう、持っていても持っていないくても同じだから、だれかにあげよう。」

「うん、ぼくもそんな気がするんだよ。でも、だれにあげようか。」
「ぼく、くにおくんにあげたいんだがな。きみはどう。」

「それはいいね。くにおくんは、きょうがんばって話したね。あのメダルをあげたら、もっとよく話せるようになるよ。」
つぎの日、ふたりは「きぼうのメダル」をくにおくんにあげました。ふたりが、

「じゃ、くにおくんだいじに持っていてね。」
「メダルのおじさんも、きつとどこかで見ているよ。」

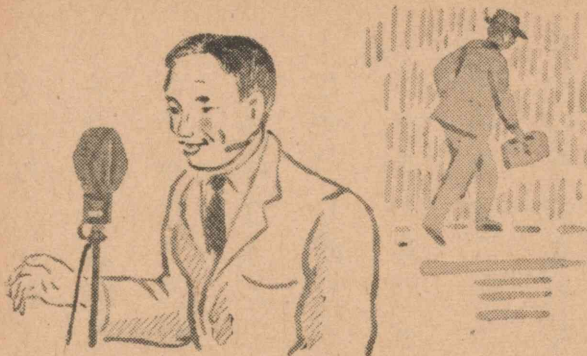
といいながらわたすと、くにおくんは、
「たけしくん、ありがとう。じろうくん、ありがとう。」
と、そのメダルを手にしつかりにぎりましました。
それから二日目の、日曜日の朝でした。



たけしくんのおとうさんがラジオのスイッチを入れると、ちょうど「たのしいゆめ」という話のとちゆうでした。太いすっかりした男の人の声でした。

「みなさん、それでは、もう一つのわたしのゆめをお話しましょう。」

それは、ちょうど今から一年あまり前のことでした。わたしは、それまで長い間持っていたメダルを落としてしまったのです。その日は、電車に乗ったり歩いたり、一日じゆういそがしかったので、どこで落としたかわかりませんでした。ここまで聞いた時、たけしくんははっとしま



した。もしかしたら、あのメダルではないかしらと思つて、ラジオのそばへとんでいきました。ほんとにそうだったでしょうか。

放送は続いています。

「さて、そのメダルは、二十年ほど前に、わたしが百メートル競走でもらったものです。ですからそのメダルを見ると、わたしは、いつもいっしょうけんめいで走ったあの時のことが思い出されて、元気が出るのです。」

それは銀のメダルで、表にはスタートする選手のすがたがあつて、うらには一九三〇としるしてあります。」

たけしくんはびっくりしました。

「やっぱりそうだ。このおじさんだ。このおじさんがメダルのおじ



子どもかしら、わたしは、なんとなく子ども
のような気がするのです。
もしそうだったら、その子は、いつもあの
メダルをだいに持っていてくれればいいな。
それから、かわいいメダルのなかよしが、
どんどんふえてくれるといいな。
そうして、その子どもたちがみんなそろっ
て、なかのいいしっかりしたおとなになっ
ていったら、どんなにゆかいなことだろう。――
わたしは、今、こんな楽しいゆめを見続けて
いるのです。

さんだ。おじさあん。

思わず大きな声でいってしまいました。おとうさんがびっくりし
て、

「どうしたんだ。たけし。」

と、おっしゃっても、たけしくんは、

「あとで。」

と、いって、ラジオに耳をくつつけるようにしました。

放送はなお続いていきます。

「みなさん、わたしは、今、そのメダルをほしいとは、すこしも思
っていません。それよりも、こんな楽しいゆめを見ているのです。

――あのメダルを拾った人は、どんな人だろう。おとなかしら、

みなさん、もしも、このゆめがほんとうだったら、それこそどんなにすばらしいことでしょう。」
話は終わりました。

たけしくんは、大急ぎでおとうさんにお話してから、じろくんのうちへとんでいきました。

「じろくん、わかった、わかった。メダルのおじさんがわかったよ。」

「えっ、メダルのおじさんが。どうして。」

「さっきラジオで放送したおじさんだよ。」

「そうか。よかったな。早く『きぼうのメダル』のことをお知らせしたいな。」

「うん、——おじさんの所、放送局で聞けば、すぐわかるね。」

「そうだ。すぐ放送局へ手紙を書こうよ。」

「そうしよう。」

ふたりは、むねをおどらせながら手紙

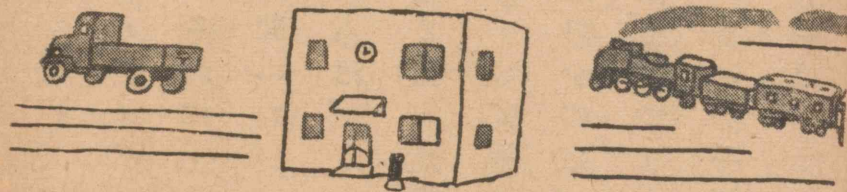
を書きはじめました。

○アナウンサー

「メダルのゆくえのお話は、きょうはこれでおしまいです。さあ、これからこのメダルはどうなるでしょう。みなさんも考えてくださいね。この続きは、またこのつぎのお楽しみです。では、みなさん、さようなら。」

—— 明かるい音楽 ——





をさせてポストの中に落ちた。

「これでようしと、いつ向こうに着くだろうな。」

たいちくんのひとりごとが聞こえたが、すぐ、ぞうりのパタパタいう音がした。いってしまったらしい。

きゆうに暗い所へはいったので、目が見えない。じっとしていると、だんだんうす明かるくなった。入口から、細い光がはいつて来る。見回すと、手紙やはがきが七・八まいいる。

「みなさん、こんにちは。暑いですね。」

というど、すみの方にいたはがきが、

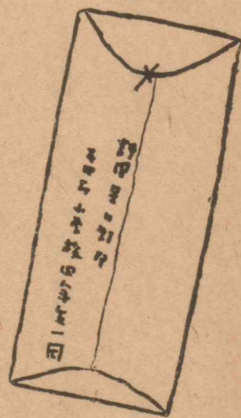
「まったく暑いね。ぼくは一足先に来たので、なお



五、海から

(一) ゆうびんの旅

たいちくんは、手をふりながら、海岸のほこりっぽい道をすたすた歩いている。ぼくは、その手にしっかりつかまえられていた。ぼくは、たいちくんの級の人たちが書いた手紙である。



たいちくんは、曲がりかどのポストの前で立止まった。そうして、ぼくの表を見なおしてから、ポストの口にさしこんだ。ぼくは、「バサリ」と小さな音を

暑いよ。それに暗いし——」。

ほかのものもぶつぶついい出した。しかし、どうにもしかたがない。それにしても、早く東京へいきたいものだ。ぼくは、あのはがきに聞いた。

「きみはどこへいくの。」

「ぼくは、北海道（ほっかいどう）ゆきだ。」

「ずいぶん遠くへいくんだね、きつとおもしろい旅行ができるよ。と、ほかのはがきが、横から口をだした。

「ぼくはつまらないや、すぐ近くの町までだ。」

「一まいの手紙がぼくに、

「きみはどこへいくの。おなかがだいぶふくれているね。」

と、聞いたから、ぼくは答えた。

「うん、ぼくは東京へいくんだ。たいちくんたちが、東京の子どもとお友だちになるうということづけを持ってね。」

「東京だって。うらやましいなあ。きみもゆかいな旅行ができるよ。」

ほかのものも、うらやましそうにぼくを見ている。ぼくは、むねが、わくわくした。早く、こんな暗い所からとび出したいと思った。

しばらくすると、ポストの前の方で、カチャカチャツと音がした。小さなとびらが開いて、光と風とがさつと流れこんだ。ほつとしたゆうびんやさんだ。ゆうびんやさんは、ぼくらをつかみ出すと、大きなかばんの中にすぽんとほうりこんだ。ここはポストの中よりも暗くて、暑い。みんながっかりしてしまった。自転車にゆられて二

くの表には、まるいしるしがついてしまった。

「さあこれで一人まえだ。」

「どうして。」

「局員さんがスタンプをおしてくれただからさ。あそこをごらん。ほら、スタンプをおしてもらえないのがあるだろう。」

そばで話しているの、見ると、そこには何まいかの手紙やはがきがとりのけられている。

「あれはどうしたの。」

「きつてがはってなかったり、やぶれかかっていたり、あて名がはつきり書いてない組なのさ。気の毒だね。」

ぼくはそつとスタンプを見なおした。はつきりついていた。

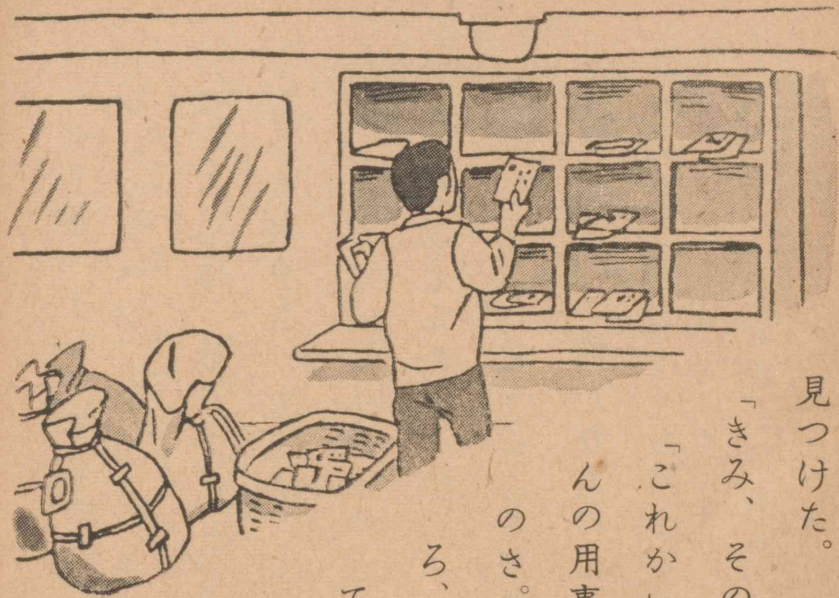
○ ○ ○

シュツシュツ、シュツシュツ、汽車は山の間を走っている。

ぼくたちは、ゆうべ、このゆうびん車に乗せられたのである。ぼくたち東京ゆきのものは、まとめて大きなふくろに入れられている。このふくろは、ゆうびんやさんのかばんとちがって、小さなあみ目から外が見えるから、ゆかいだ。

ゆうびん車に乗りこんだ局員さんは、さつきからふくろのせいりをしている。平野がひらけてきた。汽車が止まった。局員さんは一つのふくろをおろした。すると、かわりにいくつかのふくろがつまこまれた。

ぼくは、このふくろの中で、何かへんな紙がはってある友だちを



見つけた。

「きみ、その紙は何だい。」

「これかい。じつはね、ぼくは東京のたかしくんの用事で、〇村のてる子さんの所へいったのさ。いってみると、てる子さんは、先ごろ、おうちの人といっしょに東京へ行ってしまったというんだ。」

「じゃ、きみはどうするの。」

「しあわせなことに、てる子さんの移った場所がわかったんだよ。ぼくの上の紙には、そこへまわしてくだ

さいと書いてあるんだ。」

「それはよかったね。」

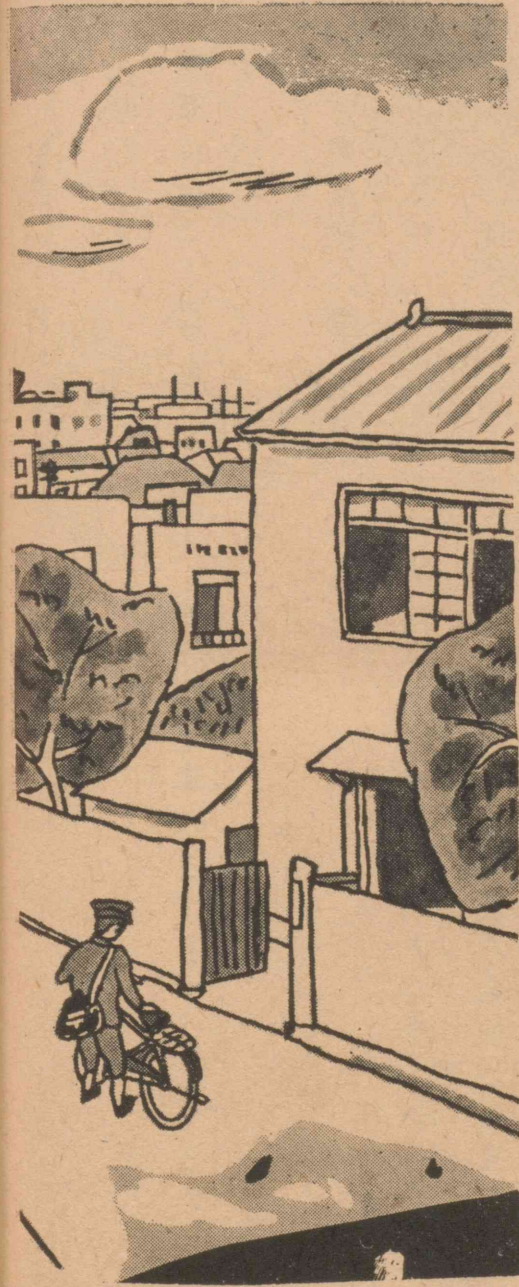
東京に近づくにしたがって、ゆうびん車はますますこんできた。

夕方東京駅に着いた。

ぼくたちは、休む間もなく車に乗せられて、大きなゆうびん局に運ばれた。ぼくは、ここでいっしょに旅をした友だちとさよならをしなければならなかった。そして、また新しい友だちができた。ここでは赤いダットサンに乗った。東京の町、すばらしいなあ。びっくりしているうちに、別なゆうびん局に着いてしまった。

そのばん、ぼくは旅のつかれで、ついうとうとしてしまった。起

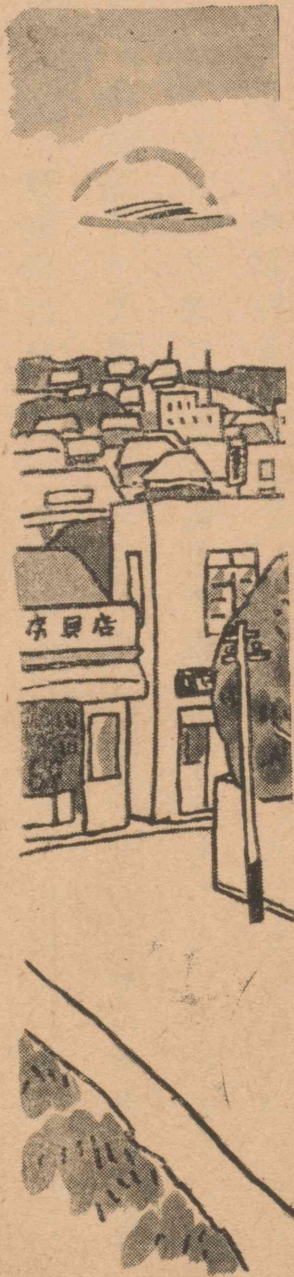
こされて目がさめた。ぼくたちをせいりしている人がある。外はま
だうす暗い。ぼくたちは、町によって分けられたり、番地の順にな
らべられたりした。はいたつするのに便利で、まちがいのないよう
にやっているんだと思った。これは東京のゆうびんやさんだった。



ゆうびんやさんは、ぼくたちをせいりして、かばんに入れた。そ
うして、朝の町に出ていった。一通、また一通、つぎつぎに友だち
ははいたつされていく。いよいよぼくの番らしい。ゆうびんやさん
は、ある小学校のうら門にさしかかると、ぼくを右の手に取った。

「さよなら」。

ぼくはゆうびん受入れの中へ、ストンと落ちた。
静かだ。学校には、まだだれも来ていないらしい。



(二) 海のたより

町のみなさん、お元気ですか。



ぼくらの村は海岸にあります。わんになっていて、静かな海です。村のうしろはすぐ山になっています。平らな土地が少ないので、田や畑はあまりありません。村の人たちの多くは、海で働いています。ぼくたちの学校は山を少し登った所にあります。山を開いて作ったので、運動場はせまいです。けれども、ここからは、村はもちろん、海の遠くまで見わたすことができます。どんな暑い時でも、海から風がふいて来て、ぼくたちの教室をすずしくしてくれます。ぼくたちは、毎朝体そうのあと、海の方を向いて、しんこきゅうをし

ます。海はとてもいいところです。泳ぐこともできるし、船遊びもできるし、いろいろな魚や貝を取ることできます。ぼくたちは波の音を聞きながらそだちました。たとえばというと、波の音はぼくたちの子もり歌といってもいいでしょう。

これといっしょにぼくらの作文をお送りします。ぼくらの生活を書いたものです。海がぼくらと、どんな深いつながりを持っているかが、おわかりになると思います。お読みになったら、ひひょうや感想を書いて、送ってください。また、みなさんの作文も送ってください。みなさんの先生は、ぼくたちの山本先生とお友だちだそうですね。みなさんも、これからぼくらのなかよしになってください。

小学校四年生 いちどう。

(三) 漁村の一日

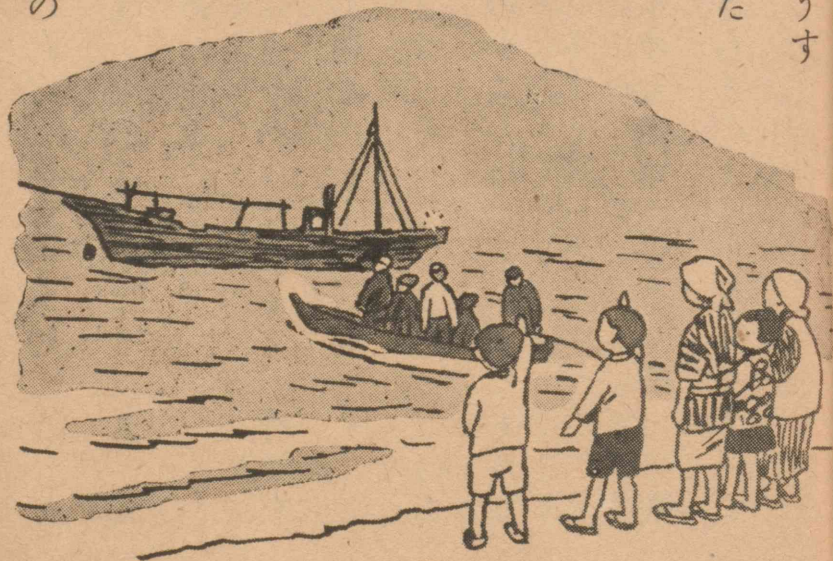
漁村の朝は、ポンポンという発動機の音で夜が明けます。

東がまだ明かるくならないうちに、おきだす家があります。そうして、父や兄のべんとうをつくります。漁に出かけるのです。船は、前の日から用意されて、はまから百メートルぐらいのところにかかりをおろして待っています。したくのできたおとなたちは、小さな船で本船へ乗りこみます。本船の大きさや、漁のしかたにより、十人ぐらいの時もあり、何十人という時もあります。べんとうのほか、何日分かのたべ物を持っていくこともあります。「じゃ、出かけるぞ」。

大木 やすお
青田 たいち 合作
中村 まさ子

船はスクリュートのひびきを残して、うすやみの中を走りだします。女や子どもたちは、きょうも大漁になるようにといのりながら、しだいに遠くなる船のあかりを見送ります。そうして、家に帰るころ、やっと東が白みかけるのです。

子どもたちが学校へいったあと、家の人は、前に取った魚のしまつをしなればなりません。さいてはらわたを取ったり、ほしたり、ほしあがったの



をまとめたりするので。天気さえよければ、漁に出た船のことを
しんばいするものはありません。家でも、学校でも、はまでも、た
だめいめいのしごとをいっしょうけんめいやるので。

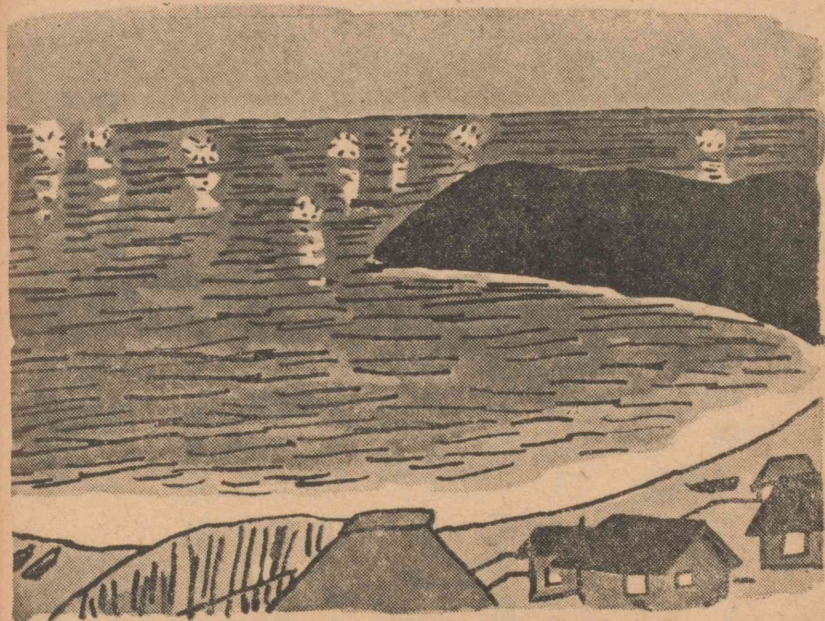
学校が終ると、はまは子どもたちでにぎやかになります。野球を
したり、すもうをとったり、すなや石で遊んだり……。水がすこし
あたたかくなると、海の中へとびこみます。そして、波とふざけあ
ったり、泳いだりします。子どもたちのからだは、しお風にあたり、
日にやけて、黒くたくましくなります。冬でも黒いのです。

夕方、船が帰って来ます。色とりどりの大漁旗を立てて帰って来
る船を見ると、はまはきゆうにお祭りさわぎのようになります。子
どもたちは遊びをやめて、いそがしくとびまわります。船を引き上
げるやら、あみをほすやら、魚のしまつをするやら、おとなにまけ
ずに働きます。

けれども、なかには大漁旗を立てずにさびしく帰って来る船もあ
ります。また、夜、漁をするために、わざわざ夕方出かける船もあ
ります。

夕食のけむりが立ち始めると、魚をやくにおいが村中にただよい
ます。子どもたちは、父や兄の勇ましい漁の話聞きながら、楽し
い食事をします。そうして、「ぼくも大きくなったら」と、まだ見た
ことのない広い広い海を思いうかべます。

そのころでも、まだ帰って来る船があるらしく、はまの方からは、
ポンポンという音がひびいてきます。子どもたちは、その音を聞き



ながら、ねどこにもぐっていつか
ねいってしまうのです。

そんな夜、はまに出てみると、
海の上に新しい村ができたかと思
うほど、美しいけしきが見られま
す。夜の漁をする船の火が点々と
ならんでいるのです。その間を右
左に動いていくあかりも見えます。
音はその船からするのです。

漁村の夜は、ポンポンという発
動機の音でふけていきます。

(四) 帰る船

上原たけお

夕方、おとうさんの船をむかえにいきました。「大漁だといいな
と思しながら、歩いていきました。

はまでは、みんなが遊んでいました。ぼくも石投げのなかまにな
って遊びました。

そのうちに、船が帰って来ました。村の人たちがぞろぞろと集ま
ってきました。台をならべるもの、台に油をぬるもの、つなの用意
をするもの、はまは、きゆうににぎやかになりました。

船はともをこちらに向けています。二本のつなが、右と左にかけ
られました。

「さあ、みんな、引いた、引いた。」

だれかが大きな声でいいました。ぼくたちもつなにつかまりました。

「ヨイヤサ、エイサ。」

「ヨイヤサ、エイサ。」

二本のつなには、何十人もの人が
ずらりとならんで、引っぱって
います。船は、静かに水の中から大
きなからだを出してきました。

船の上に立ったおとうさんが、赤
黒くどうぞうのように見えました。

引上げが終わりました。手が赤く



なりました。かどのおじさんが、

「やあ、ごころう、ごころう。」

と、いいながら、つなをまどめにかかりました。何が取れたろうか、
見にいきました。船の上では、にさんが下の人と、

「雲のぐあいがおかしいから、早めに帰った。」

などと、話しています。あみをおろして、すなはまにひろげました。
魚はかつおとさばでした。大漁というほどではありません。それで
も、にさんがざるに入れてかついでいくぐらいはありました。大
漁なら、しまつにこまるほどあるのに――。

もう日がくれかかりました。うす黒くなった海の向こうに、へん
な雲が見えてきました。海があれなければいいがなあ。

夕はんのところ、海の音がなんだか高くなってきました。おとうさんにはいさんに、「少しはあれるかもしれないな」と、話していました。

(五) あらし

野村しゅうじ

朝から東風が強い。おとうさんの船は、きょうは思いきって休んだ。ゆうべから天気のごあいがへんだったからだ。

ぼくは、家でにいさんとあみのつくろいをしていた。おとうさんは、夕方船の見回りにいかれて、まだ帰らない。

「おーい。おーい。」

風にまじって聞こえてきた。おとうさんの声ではない。だれだろう……。またよんだ。にいさんとぼくとは、戸を開けて表へ出た。どてへかけ上がった。暗いままの方で何か声がする。あかりがちらちら見えたり消えたりして、動いている。

「船がやられたらしいぞ。いこう。おまえもこい。」

にいさんが、走り出しながらいった。ぼくは続いてどてをかけおりました。風が強くなったようだ。はまに着くと、船が岸にぶっつけられている。どこの船かわからない。となりのおじさんがいた。おとうさんの声も聞こえた。村の人がどんどん集まって来た。

あかりをたよりに、太いつなが船にしばりつけられた。

「いいか。」

大きなさけび声。

「いいぞう。」

船の方から、答えた。

風で声が流される。

「さあ、みんな引いてくれ。」

おとなも子どもも、つな

取りついた。

「ヨイシヨ、ヨイシヨ。」

みんなの声が勇ましくそろった。いつもより力がはいっている。

船が上がった。村の人たちは船員をとりまいた。発動機が止まっ

て、ここに流されて来たという話だ。船も人も無事だった。



村の人たちは、くちぐちに、

「よかった。」 「よかった。」

と、いいあっている。船の人たちは役場へあんないされていった。

家に帰ったら、間もなく、おとうさんも帰って来られた。おとう

さんは板の間にこしをおろすと、

「まあ、まあ、よかった。」

と、いかにもうれしそうにいわれた。

いちばんはじめにあの船を見つけたのは、おとうさんだったそう
だ。

「広い海であんなことになったら、どうだろう。」などと考えて、な
かなかねつかれなかった。

(六) とびこみ

◎ 木村としお

けんちゃんが、

一・ニの三でとびこんだ。

波の上に、まっすぐに

とびこんだ。

青い水が白っぽくなって

わきあがるようだ。

あわがシュツ、シュツと消えると

けんちゃんのまるい頭がういた。

青い波にひよっこりういた。

◎ 大島きみ子

夕方の海 赤く光っている。

向こうのひ もえそうだよ。

汽船の電燈

ぽかりとついたよ。

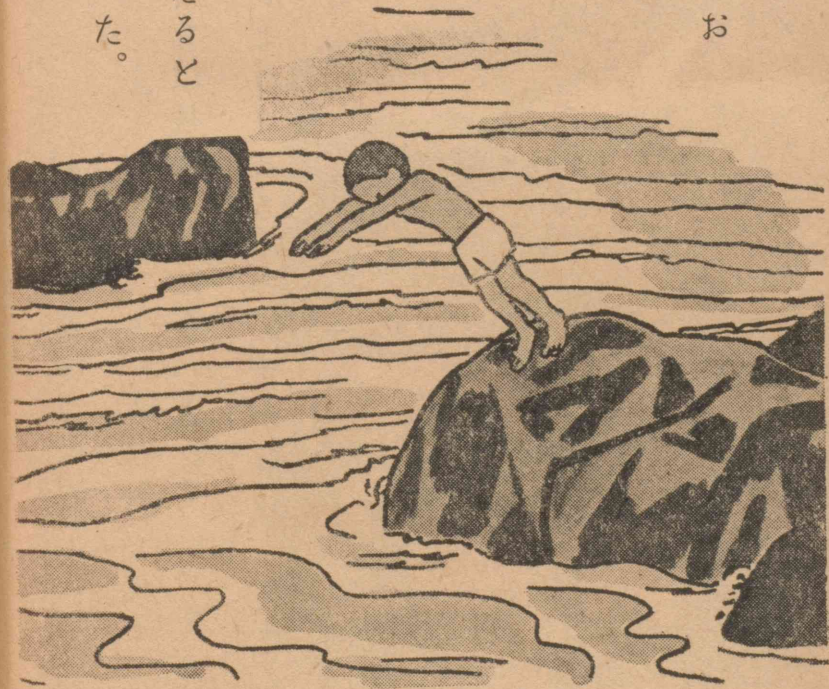
◎ 土田としえ

はまのすな 銀に光るよ。

ちよつと落ちている いわし。

日に照らされて

はらが白い。



六 わたしたちの放送

(音楽が弱くなって)

とし子「みなさん、お元気ですか。校内放送の時間です。きょうは四年生のお友だちが、お話とものがたりをお送りいたします。はじめは山村みち子さんが『まことの友だち』というお話をいたします。みち子さん、どうぞ。」

(音楽始まる。話が始まると音楽がしだいに弱くなって話と重なってしばらく続く。)

みち子「今から二千年あまりもむかしのことです。イタリアとアフリカ大陸にはさまれた地中海の島、シシリイ島に、デーモン、ピ

シアスというふたりのギリシヤ人がいました。このふたりはひじょうになかのよい友だちでした。何かにつけておたがいにたすけあつてくらしていました。

ところがある時、ピシアスが王様のおいかりにあつて、ろう屋に入れられ、とうとうころされることにきまりました。その時、ピシアスは、死ぬ前に、家のさまさまな用事をかたづけしておきたいから、



家へ帰していただきたいと願い出ました。ピシアスの家は王様の都からだいぶ遠い所にあるのでした。ピシアスがとちゆうでにげてしまうことをしんぱいしたものか、その願はゆるされませんでした。ピシアスはたいそうかなしみました。

そのことを聞いた友だちのデーモンが、王様の前にいってこういいました。

『わたしの友だちのピシアスは、かたくやくそくをまもる男でございます。いちどやくそくしたら、どんなことがあっても、まもりとおす男でございます。家に帰っても、やくそくどおりにきつと帰ってまいりますから、どうぞピシアスのぞみをかなえてやってくださいませ。そのかわり、このわたしが、ろう屋

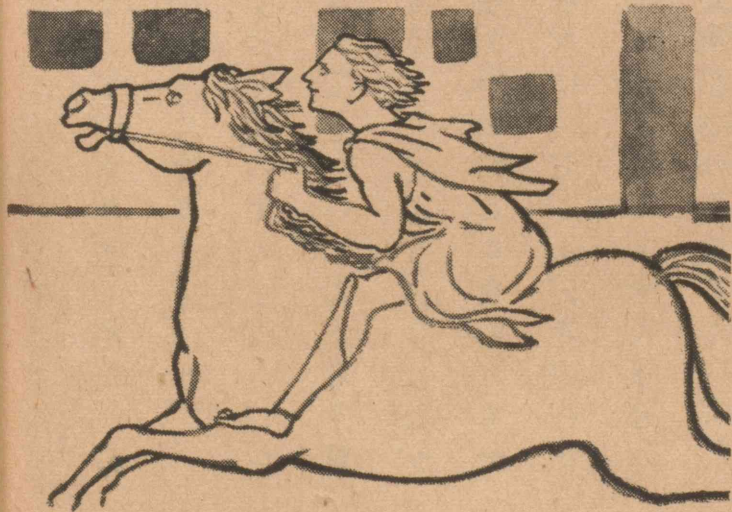


にはいます。もしピシアスが帰らないようなことがありましたら、わたしが身がわりになりましょう。』
王様はだまって聞いていました。たとえりっぱな人でも、いったんろう屋から出てしまうと、どんなふうにもかわってまちがいがおこらないともかぎらないだろうに。じぶんが身がわりになって、友だちを帰してやろうというのには、王様も心のうちでたいへん感心しました。そしてデーモンのいう

とおり、ピシアスの帰るのをおゆるしになり、デーモンを身がわりに入りました。

ピシアスは、デーモンの心に感謝してたいそう喜んで家へ帰っていきました。家の用事をかたづけ、家の者やしんるいの者に別れをつけました。しんるいの者の中には、遠くへにげていくようにすすめる者もありました。

しかし、ピシアスはデーモンのまごころをわすれることができませんでした。デーモンがじぶんの身がわりにな



っているのだと思うと、じっとしていられませんでした。じぶんのころされることにきまっていたその日の朝早く出発しました。どちゅうでうまがきずついて、乗りかえたりして思わぬ時間をとって、しまいました。

ピシアスはおくれてはたいへんと思つて、うまにむちうちました。

やっど、都へはいりますと、じぶんがはいっていたるう屋の前は通ることができないほどの人ばかりです。

数百人の人々が、ぼうぐいのまわりを、とりまいて、近よるこ



とができません。ピシアスはうまからおりて、
『何事でございますか。』
とたずねました。

すると、いちばん外がわにいたひとりの男が、
『まあ、ごぞんじないのですか。今、デーモンがころされるところですよ。それ、ごらん下さい。あそこにしばらくられているのがデーモンですよ。ばかな人ですよデーモンという男は。友だちが帰って来ないことは、はじめからわかっていそうなものなのにね。』

といたしました。それを聞くと、ピシアスは、
『デーモン、デーモン。』

と気がいのようによび続けながら、人々をおしわけて前に飛び出しました。

『デーモン、帰って来たよ。デーモン、ころされるのは、このピシアスだ。』

デーモン、安心してくれ。』
と、じぶんをしんじてくれた友の首にすがりついてないてしまいました。

あつまっていた人々は強くむねをうたれて、このふたりの方へなだれていきました。友だちを思う



心のあたたかさに動かされたからです。それにもまして、はげしく心をゆすぶられたのは王様でした。王様はふたりの前にいってこういいました。

『ピシアスをゆるす。ピシアスもデーモンも、友だちを思うまごころが深い。このふたりはまことの友だちである。デーモン！ピシアス！もしできるなら今までのことはわすれてしまつて、これからわたしの友だちになつてくれないか。』

そして、王様はふたりの手をかたくにぎりました。あつまった人々の中からはげしいはくしゆがわきおこりました。〔音楽〕

とし子「これで山村さんのお話は終わりました。続いて、『ジョン万じろう』というものがたりをお送りいたします。これはほんとうにあ

つたお話で、先生がお書きになつたものです。お話をするのは森田よう一さんです。ぎおんと音楽は、六年のみなさんがつたつてくださいます。』

（はげしいあらしの音 波の音）

ものすごいあらしの中で、今、一そらの小さな船が大波とたたかっています。船には、死にもものぐるいにこいでいる五人の男のすがたが見えます。

（大波のかぶる音）

「あつ、たいへんだつ。」

船から聞こえるするどいさげび声。



のしかかるような大波が、「あっ」という間にろもかじもさらってしまつたのです。もうどうすることもできません。

(はげしい波の音)

みなさん、このあらしの中でたたかっている五人は、いったいだれでしょう。それは十五才の少年万じろうと、友だちの五えもん、それに五えもんのいさんやおじさんたちの五人です。そうして、この話は今から百何年か前のことです。

万じろうは、漁しの家にとだつた元気でりこうな少年でした。おとうさんに早く死にわかれたので、毎日おとなたちの魚を取るてつだいをしていたのですが、ある年の一月、この五人で魚とりに出てあらしにあつたのです。

(すこし静かな波の音)

あらしがいくらか静まつたのは、それから一週間目。ふしぎに船はずみませんでした。五人はゆめのような気持で、ぼんやり海をながめていました。すると、とつぜん万じろうが、

「あっ、」

とさけびながら、遠くの方を指さしました。見ると、ずっと向こうを、白いつばさの大鳥が群をなして飛んでいくのです。

「やっ、あほうどりだ。」

「しめた。きつと近くに島があるぞ。」

五人はよろめきながら立ち上って、あちらこちらを見まわすと、はるか遠くの雨雲の下に、かすかに一つの島が見えるのでした。

「もうだいじょうぶだ。」

「これでたすかったぞ。」

急に元気づいた五人は、ほ柱を立てなおしてほを張りました。

ところが、近づいてみてがっかりしました。がけは海岸から見上げるようにそびえたっているし、その下のおにのきはのよ様な岩には、ものすごい大波がうちつけて、高いしぶきをふき上げているのです。

(波のうちつける音)

「気をつける。あぶないぞ。」

五人ははげましあつて船を進めました。

(大波の音、船のくだける音)

「あつ。」

ざんねんにも、船は岩にうちつけられてしまいました。しかし、さいわいにも五人はうまく岩にとりすがつて、やっこのことでがけの上にはいあがりました。

ほつとしてあたりをながめる五人。

さて、この島はいったいどんな島だったでしょうか。

それはしゅういが四キロぐらいで、木や草といっても、かやざさやぐみの木などが、そこここにひよ



ろひよろはえているばかりの島でした。住んでいるものは、ただあほうどりだけで、まったくの無人島だったので。

五人は大きなほらあなを見つけて、そこに住むことにしました。それからは、毎日毎日水も十分のめず、鳥や魚や海そうなどばかりたべる日が続きましたが、万じろうはいつも元気を出して、みんなをばげましたり、せわをしたりしました。

こうしていろいろうちに、いつか六月になりました。あれから、もう半年近くもたったのです。あほうどりのひなも、五月末になると大きくなって、やがて親子連れだつてどこかへ飛んでいって、もうすがたを見せなくなりました。万じろうは、ときどき海をじつとながめていることがありました。

(静かな音楽始まる。ときどき波の音)

あれからもう半年。

おかあさんや、

兄や姉や妹はどうしているだろう。

足もとにうちつける波。

しぶきの中のにじに、

ふるさとの海が見える。

どこまでも続く海に、

ときどきくじらがうかぶ。



あれが船だったらいいなあ。

そうだ。この海は

ふるさとの海に続いているんだ。

きつと帰れる。がんばるんだ。

(音楽、波の音終る。)

ある日のこと、万じろうが、五えもんと貝を拾っていると、はるか東の方にまめつぶぐらいの点が見えました。

「船かな、雲かな、—— あっ、船だ。船が来たぞーっ。」

万じろうはさけびながらとんで帰りました。それは三本マストの外国の船でした。

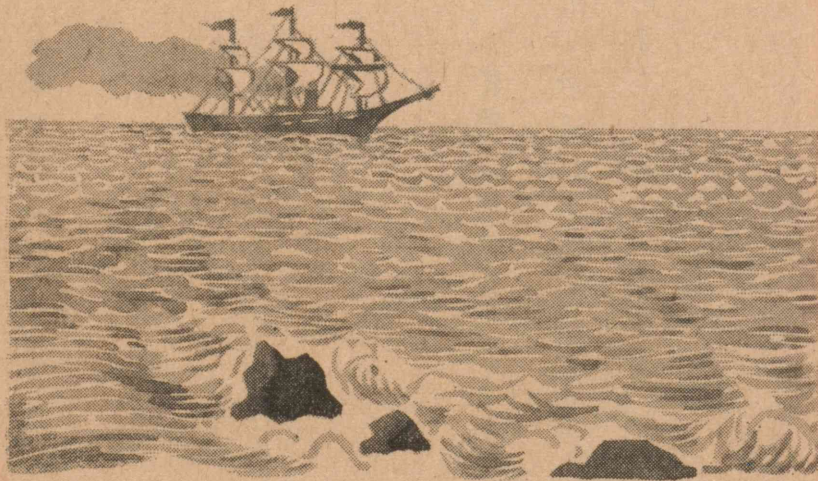
「おーい、おーい。」

「おーい、おーい。」

みんなは声をかぎりによびました。着物をぬいでぼうの先にくっつけて、それをふりまわしました。

やがて、二せきのボートがこちらへこいできます。

(波の音、かいの音)



どうとう五人は、五か月ぶりて無人島から救い出されたのです。

この船はアメリカのほげい船でした。

船長は、ウイリヤム・ホイットフィールドという名まえで、たいへんりっぱなしんせつな人でした。

「おお、ジャパニーズ、ジャパニーズ。」

といって、着物をようふくにかえさせたり、食事の用意をしてくれたりしました。五人はくつというものはじめてはいたり、いろいろかわったことばかりでしたが、それにもすぐなれて、元氣も出てきました。

それから一週間ほどたつと、いよいよくじらとりです。外国式のくじらとりを見るのははじめてですから、みんな目をさらのようにして見ていました。

(波の音、ボートが波を切る音)

ボートが、先をあらそってくじらにせまっていきます。

もりを手にしてへさきに立った男が、はっしともりを投げます。

くじらは、くるったようににげまわります。

(海水のはねる音)

やがて、くじらは力つきて動かなくなりす。

その勇ましい手ぎわのよい仕事ぶりをじっと見ていた万じろうは、「そうだ、今にじぶんも。」とかたく決心をするのでした。

六か月ほどくじらとりをして、船はホノルルの港に着きました。

五人はここで上陸しましたが、船はまたアメリカへ向かうのです。ところが、船長は、万じろうが勇気があつてりこうな少年なので、万じろうをもっとせわをしたいと思いました。

「わたしといっしょにアメリカにいつて、もっと勉強したらどうかね。」

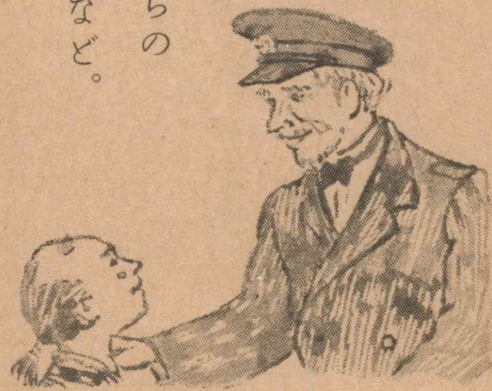
万じろうは、しばらく考えました。

(静かに小さく音楽始まる)

しんぱいしながら待っているおかあさ

んのこと、いつ帰れるかわからないこれからのこと、まだ見たこともないアメリカのことなど。

(音楽大きくなる)



けれども、万じろうは、そのしんせつなことばに勇気を出しました。「ぜひ連れていってください。お願いします。」

(音楽静かに終る)

万じろうはみんなと別れて、またその船に乗りこみました。新しいきぼうにもえた万じろうは、それから毎日いっしょうけんめいでした。

船長や船員たちは、万じろうのことを「ジョン・マン」とよびました。それは、船の名の「ジョン・ポーランド」の「ジョン」と、万じろうの「マン」を一つにした名まえで、毎日みんなから「ジョン・マン」「ジョン・マン」といつてかわいがられました。

やがてアメリカに着くと、万じろうは船長の家にひきとられて、

はじめで学校というものに通いました。すぐ友だちもできて楽しい日が続きましたが、万じろうは、ときどき広々とした海に出て、くじらとりをやりたいと思うのでした。

すると、思いがけなくまたほげい船に乗る時が来ました。こんどは前とちがう船で、船長もちがう人でした。ところが、とちゅうで船長が病気になったので、みんなで船長と副船長のせんきよをしたところ、万じろうが副船長になったのです。副船長になってからも、万じろうの働きぶりはますますりっぱでしたが、万じろうの心につもうかぶものはおかあさんのことでした。

それから長い年月がたって、いよいよ日本へ帰る時がきました。ホノルルにいる五えもんたちといっしょに、ある商船にたのんで日

本の近くまで連れていってもらい、そこからはボートでこいでいくことにしました。万じろうはじぶんでボートを買って、「ぼうけん号」と名をつけ、その商船につんでもらいました。

(波の音)

船はどんどん日本に近づいています。はるかに日本の近くの島が見えた時、「ぼうけん号」は商船からおろされました。

(大波の音)

あのあらしにあってから十二年目、いつもゆめに見ていた日本はもうすぐそこです。喜びに勇んだ万じろうたちは、大波をのりこえ、しぶきを頭からあびながら四時間もこぎにこいで、とうとうすなはまにのりつけました。

(すななきしむ音、波の音)

なつかしい家に帰った時のおかあさんの喜びはどんなだったでしょう。けれども、待っていたのはおかあさんだけではありませんでした。そのころの日本も、万じろうを待っていたのです。

はじめて外国とつきあいを始めたそのころの日本は、外国のようすがよくわかる人がどうしても必要だったのです。そこへ帰ってきたのが、今は世界の新しい知識を身につけた、二十六才の青年万じろうです。万じろうの今までの苦労や勉強は、一時に光を放つようになりました。外国のようす、外国のことは、造船、ほげい、航海など、日本のためにどれほど役だったかわかりません。政府のしごとで、二回もアメリカへわたって、りっぱな働きもしました。

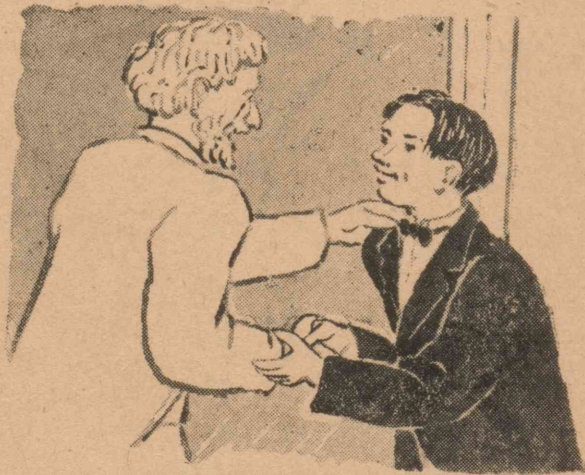
アメリカでは二十何年ぶりに、命の恩人
ホイット・フィールド氏をたずねました。

(音楽静かに始まる)

ここは、ニューヨークの近くの町です。
見おぼえのある船長の家のげんかんで、
ベルをおす万じろうの指はふるえていまし
た。

「おお、あなたが、あの時のジョン・マン
ですか。」

老船長は目を見はるように、りっぱになった万じろうを見ながら
その手をかたくにぎりしました。



(音楽静かに終る)

とし子「ただいまのものがたりは、森田よう一さんでした。つぎは、『放送を聞いて』というだけで、野村先生のお話をお送りいたします。野村先生、どうぞお願いいたします。」

先生「きょうの学校放送は、四年生のみなさんがそうだんして、プログラムを作り、放送者をきめ、練習をして、みなさんの力で行われました。わたしが聞く前に考えていたことは、みなさんには少しほねがおれるのではないかということでした。しかし、放送を聞いてみると、みんなりっぱにできました。これはみなさんが力を合わせてやったからですが、ぎおんや音楽レコードを受持ってくれた六年生のおてつだいの力も、わすれてはならないと思います。

ます。とし子さんのアナウンスは、はぎれよくひびいて、それにおちついていてたいへんよくできました。『まことの友だち』も、『ジョン・万じろう』もほんとによくできましたが、まだ発音やアクセントに気をつけなければならぬところがありました。もう少し、ゆっくりした調子で話すと、もっとよかったです。このつぎは、もっとりっぱにできるようにしてください。」



学習のてびき

国語の勉強には、話す、聞く、読む、書く、つづるといふ五つの仕事があります。教科書はこのお仕事をするためのどうぐです。ですから、この教科書をつかってしっかり国語の勉強をするのは、どうしたらよいか、もんだいです。

この学習のてびきは、その勉強のしかたをしめたものです。このてびきには

じょうずに読むこと

字を正しくりっぱに書くこと

はしめしてありませんが、この仕事もだいじですから、しっかりやってください。

一 ぼくは四年生

(一) ぼくは四年生だ

○いつのことでしょう。

○まさおはどんな気もちがしたのですか。

○その気もちは、この文のどこにあらわれていますか。

をしてみましよう。

○読んでみて、ただ風景を書いただけの文だと思えますか。書いた人の心もちがわかりませんか。

○それはどんなところにあらわれていますか。

○あなたがたも、春のけしきをこんな短い文に書いてごらんなさい。

二 よく聞きよく見よう

(一) みそさざい

○これは中西悟堂という方の作品からとったものです。

○みそさざいの鳴き声はおもしろいですね。この文の中に書いてあるように、鳴き声の高いひくいをよく考えて、その通りに読めるようにしましょう。

○人の話し声にも、高いひくいがありますからよく注意してごらんなさい。

○ニワトリ、スズメ、ハトなど、近くにゐる鳥の鳴き声を、自分にきこえる通りにちょうめ

○まさおにもう一つの心が起っていますね。それはどんな心でしょう。

○あなたがたにもこんなおぼえがありましたか。話しあいましょう。

○四年生になった心もちを作文に書いてみましょう。

(二) 青いはこ

○なぜ、みんなの書いた意見をはこに入れることにしたのですか。

○意見の中で、女の子が書いたと思はれるのはどれですか。

○この文に出ているいろいろの意見をいくつかにまとめてみましょう。どんなふうにまとめたらよいか話しあってみましょう。

○この外に、まだどんな意見が出たと思えますか。

(三) 春の朝

○これはどんな風景を書いたのですか。

○どんな時見た風景だと思いますか。

○さしえについて、いっそうくわしく話しあ

んに書いて、みんなでくらべてみましょう。

(四) めだか

○これは寺尾新という方の文からとったものです。

○三人は、ただめだかを見ているのではなく、いろいろ研究しながら見えていますね。どんなところがそれにあたりますか。

○この文を読んで、はじめて知ったことを話してください。また、ちょうめんに書いてください。

三 まさおの旅

○みなさんも旅をしたらまとめておいてください。

(一) おじさんの家

○おじさんは何をしていますか。

○おじさんの話をじゅんじょよく話してごらん

(二) 海

○海や山の詩をつくってごらんなさい。

(三) 燈台にのぼる。

- これは燈台見学のきろくです。
- 燈台はおもにどんな所になてられますか。
- 燈台はどんな役をしているのですか。
- しんさくさんのお話でおもしろいのはどんなことですか。
- どんなことをもっと知りたいと思いますか。
- 燈台もりに似たような生活をする人には、どんな人がいますか。
- (四)しんさくの日記
- しんさくさんは何年生ですか。
- しんさくさんの日記のうち、いちばん心をうたれるのはどんなことですか。
- みなさんも日記をつけてみましょう。

四

- ラジオをかこんで
- (一)ラジオのこしょう
- ラジオ屋のおじさんは、どんな人ですか。話しあってみましょう。
- このラジオは、どこが悪かったのですか。
- ラジオのこしょうを病人と同じように考える

- この手紙はどこからどこへ出されたものですか。
- この手紙が旅をした道すじを、図に表わしてごらんなさい。
- ゆうびんを出すにはどんな注意がいりますか。
- (二)海からのたより
- はじめの手紙文です。どんなわけで手紙を書き送ることになったのですか。
- あとののは作文です。
- 漁村の一日はあなたがたの一日とどんなにちがいますか。漁村らしいようすはどんなところに表わされていますか。
- 漁民の生活がほかの人たちの生活とちがう点を考えてみましょう。
- あらしの文章を前の二つとくらべてちがう点を考えてみましょう。

六

- わたしたちの放送
- これは学校放送のものがたりです。
- 放送ものがたりや放送げきで使う音や音楽の

- のはおもしろいですね。病人やお医者さんにとっているのは、どんなことですか。
- NHKというのはなんのことでしょう。ほかにも、このようないいかたのものがあるか調べてみましょう。
- (二)メダルのゆくえ
- おじさんがメダルをおとしてから、くにおくんの手にわたるまでに、メダルはどんな人たちの手を通りましたか。通ったじゅんにちゅうめんに書いてみてください。
- この話のおもなことを、短くまとめて話してください。
- さて、このメダルはこれからどうなるでしょう。このつづきを文に作ってみましょう。

五

- 海から
- (一)ゆうびんの旅
- こんな文をぎ人体といいます。ことばを持たないものに、ことばがあるように書いてあるのです。

- ことを効果といいます。
- 効果の使い方については、この教科書にあるよりももっとくわしく考えてください。
- 声を大きく出すところ、声を小さく出すところ、遠くで話している声の出しかた、せりふや説明と音楽がいつしよになっているところなどがあります。
- 放送げき、放送ものがたりなどをさがして、じっさいにやってみましょう。
- 放送の設備のない学校では、教室を使ってやるようにくふうしましょう。
- ラジオと学校放送では、設備の点でどんなところがちがうと思いますか。
- (二)まことの友だち
- いつごろ、どこで起ったお話でしょう。
- どんなお話ですか。だいたいのところを話しあってみましょう。
- 友だちというものは、だれにでもあるものですね。「まことの」とついたのはなぜでしょう。
- 「まことの」ということばがあてはまるのは

はるか	119	ホノルル	127		
はんだごて	58			漁(りょう)	95
		毎(日)	68		
ひがら	27	まこと	108	(一)るい	67
ビシマス	109	マスト	124		
ひとりで(に)	4	まつり	96		
ひばり	6	まどわされて(す)	50	ろ(船の)	118
ひびき	95			ろうや	109
ひひょう	93	みがきながら(く)	17	ロビンソン・クルー	
病院	54	みがわり	111	ソー	45
ピラ	84	見なおした(す)	86		
				わきあがる(く)	106
ふきだして(す)	61	むけて(る)	99		
ふくらんで(む)	17	むちうち(つ)	113		
ふくんで(む)	17	無電	53		
(夜が)ふけて	98	メーター	57		
ふし	22	めぐって(る)	45		
ぶじ	104	メダル	62		
ふるわせて(す)	70				
		もり	127		
へさき	127	もりあがって(る)	20		
ベル	133				
		やぎ	59		
ボート	125				
ぼうぐい	114	ゆうびん(車)	87		
ほうりこんだ(む)	83	ゆくえ	62		
ほげい	132				
ボタン	47	(月)曜日	11		
北海道(ほっかいど					
う)	82	ラジオ(屋)	56		

デイモンについてでしようか。ビシマスについてでしようか。

○王様についてはどう思いますか。
(二) ション万じろう

○かわった名まえですね。どうしてこんな名まえがついたのでしょうか。

○どんな話か、だいたいのすじをちょうめんに書いてください。

○そのころの日本のようすや外国との関係はどんなだったでしょうか。先生からそのお話をうかがいましょう。

○船長さんに久しぶりにあった時の喜びをそうぞうしてみましよう。ふたりは、どんな話をしたと思いますか。

○先生のひひょうのように、どんな時でもじょうずに話ができるように注意しましょう。

新しく出たことば

アクセント	134	えんとつ	5	汽船	42
あせばむ	38			氣ちがい	115
あて名	86	おうえん	70	きって	86
アナウンサー	62	おたやか	58	漁村	94
アフリカ	108	おちついて(く)	134	ギリシャ人	109
あほうどり	119				
あま(ぐも)	119	外国式	126	ぐあい	57
あまり	92	海そう	122	空想	6
あみめ	87	かかり	13	くちびる	70
あらそう	127	重なって(る)	108	くにお(くん)	79
		かじ(船の)	118	ぐみ	121
いかつり	39	かすれた(る)	59	くらんで(む)	51
いかり(船の)	94	かついだ(ぐ)	19	くるった(う)	127
いき	5	学級文庫	13		
いわい	5	かなえて(る)	110	航海	132
いさましい	97	かぶさった(る)	23	工場	5
イタリア	108	かまれて(る)	54	こうたい	65
いのり	95	かやざさ	121	校内放送	108
		からぶり	66	交番	63
ウィリアム・ホイッ		かわりばんこ	13	子もり歌	93
トフィールド	126	観察	28		
うけいればこ	91	感謝	112	さいわい	121
うす(あかるい)	81	感想	93	さくらんぼ	18
うねり	41	かんたん	52	さしかかる(と)	91
		かんな(の花)	5	(遊びに)さそう	85
NHK	61			さだ子さん	7
えのぐ(ばこ)	5	ぎおん	117		
え(はがき)	84	きかえて(る)	7	時(間)	10

シシリー島	108	選手	62	デーモン	108
しまつ	95	(二)せき	125	テスター	57
しめた	119				
写生	5	造船	132	どうぞう	100
ジャバニーズ	126	そびえたって(つ)	120	とびら	83
しゅうい	121			とも(船の)	99
しゅうぜん	61	ダイヤル	58	とりすがって(る)	121
しょうじ	18	大陸	108	とりまいて(く)	114
商船	130	大(漁)	96		
ジョン・ポート		たからもの	64	なだれて(る)	115
ランド	129	たたか(う)	117	なんてん	17
ジョン万じろう	116	ただよい(う)	97		
しらみかける(む)	95	たちのぼる	17	にじ	123
しょっこう(光)	48	ダットサン	88	にほん(日本)	28
しんくうかん	57	たべもの	94	ニューヨーク	132
しんこきゅう	92	田村先生	62		
新聞	49	ためて(る)	13	ぬる	99
スイッチ	58	知識	131	ねじまわし	57
すきおこした(す)	20	地中海	108		
すくい	125	ちゃぶだい	6	のける	86
スクリー	95	チューブ	5	のしかかる	118
スタンプ	85	ちょうしんき	59	のりこえ	131
すもう	96				
		つきあい	131	(一万五千)ば	51
セーフ	68	(力)つきて(る)	127	はいたつ	91
政府	132	つくるい(う)	102	はぎれ	134
せま(る)	127	つながり	93	はずんだ(む)	9
船員	104	つみこまれた(る)	87	バッテリーボックス	66
せんきよ	129	(三人)づれ	8	はらわた	95

広島大学図書

0130449674 74



文庫

50

674

おことわり

本書の用紙は来年度使用教科書からより良質のもの（新教科書用紙）を使用することになつて居ります。